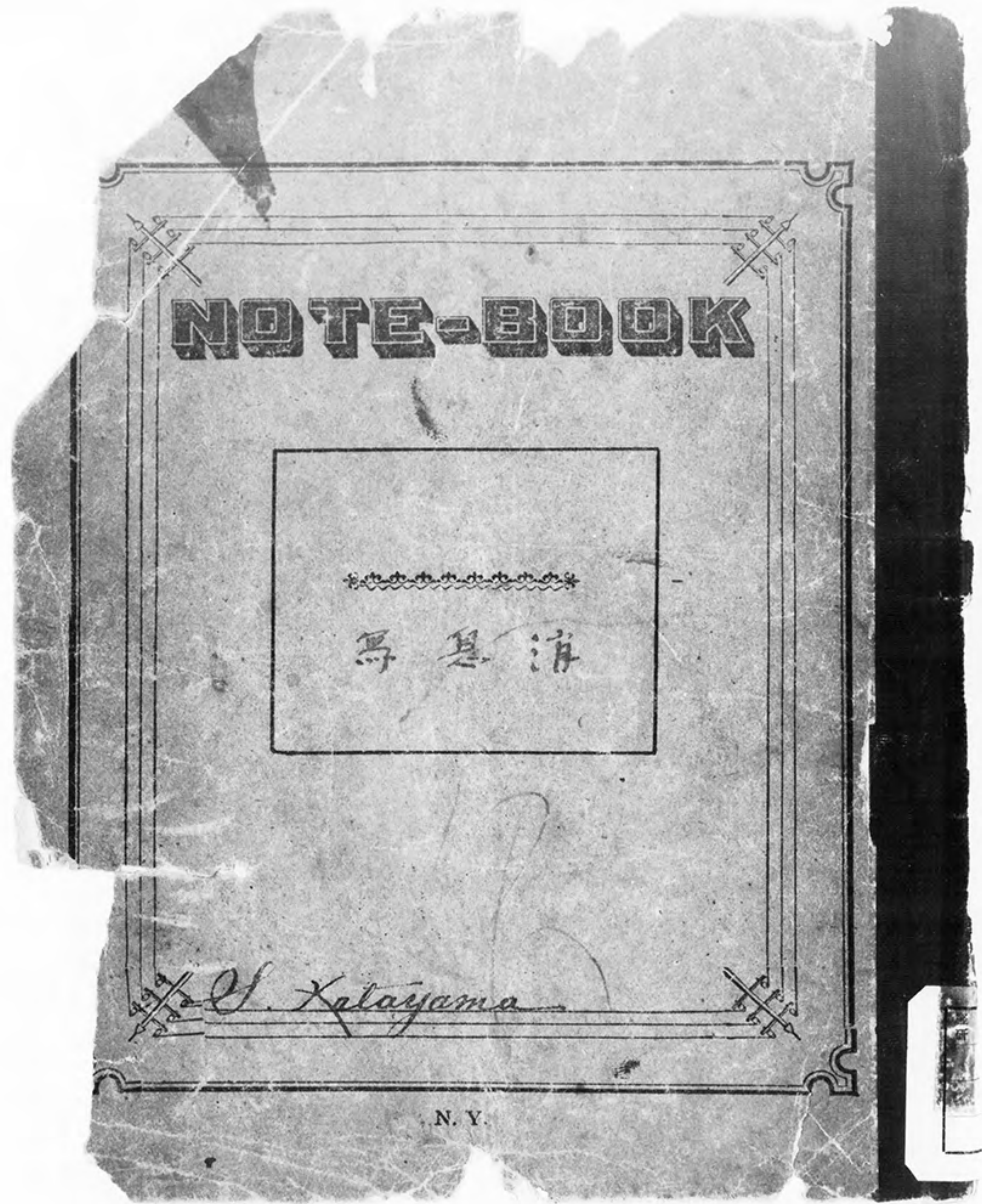


## 近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。



NOTE-BOOK

寫 懸 海

H. Katayama

. N. Y.



幸徳傳次  
 菅野須賀子  
 幸徳傳次  
 新村忠雄  
 大石謙之  
 山邊章  
 近運平  
 松尾卯一  
 坂本清馬  
 武田九平  
 高木顯明  
 岡林寅松  
 飛松典次  
 新田融  
 岡本穎一  
 新村善兵衛  
 古山力佐

2 18 28 8 2 2 7 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1

前一  
 一八  
 五八  
 七八  
 六八  
 七一  
 七九  
 八〇  
 八三  
 八四  
 八四  
 八六  
 八六  
 八七  
 八七  
 八八



E152592

3P186

幸徳傳のヤナリ

「宣後三言」愈々何れ角も千秋學となつたお水も肩が軽くならた様は愛する死  
と云ふ者は高山の雲の存るものまで遠方が眺めると方々の怪物の中にも見へるけ水と近づく  
見れば何でもないものだ唯物論者は左右に揺る揺る杖杖討の振子が停止したより此の意  
義は無い殊に親とない子にないお水には畢竟在るとは古史夫たから密々してく水〇鬼は角  
貴族には是水一音なりぬ在後になつて遂に報ゆる正を得なかつた明日知水は角  
だから此機會に於て感懐して置く〇貴様のはまもあつたから小若をと思つて筆を  
とり掛けて見たがもう時日がなれと思ふ〇先頃の本は今印刷中で二月下旬には賣  
出す予定です出果政務送る様に場を言つてある安藤氏にも送りたいから彼水の使  
所と場と通して置く〇貴様の手紙は皆着たことは公判中と毎半年毎の休  
みはたて手紙は出せなかつたし其後もしも出張許可の上要するから要件のある場にはあり  
出す正になりはなれした次頭を考へて居たが著候の言にも正取り出果前には了  
つた因獄裡よりは去張眠獄裡がよからう〇石舟の荷物物は轉句が面白かつた  
彼も一代の奇才だ且つお水には得意みださる知この人だ〇余遊ぶのからん親徳なぞ  
を送つて貰つた礼は出して置いたが西舎の機によろしく言つてく水〇るいみさしに申  
上げるお水やこの可貴い繪葉書新あり私に四方板壁の中は長月に入る自  
然は高のく繪葉の支木が絵松子の外に見へるはかりの草畑を生ほすから

アニ子供は活々とした様子や山水の情などは大に慰ま小舞す様に自然の  
景色が愛しいのですから時々三人は繪葉書では通信を移す身は姉と後  
に通信作上げり小たいの三申辭を幾日の知らぬが去張を消息して  
水端書でもよから成べく毎日頼む

此の口思ふ  
小舞第をり様

幸徳 秋水

君の手紙より小舞の夢物語は尋ね非良先を在るはアニ王を不しく知水の係し人相惟水でも一云は死だ死よんをば  
問題では各よ累ははたまた問題は唯だお水にお水のやうな極意を公現出したと子正に在るお水は唯だ問題王提提した  
なげ高豆を〇親も甲午の生運甚だ幸福で愉快であつたとして最早親も子もなし向に身輕きに感して快  
る〇君と十餘年おめて非良先をの云開で邂逅してかり常に君の厄介にばかりなつた君はお水に取  
真に傷れずまな知この一人おつた息のある中に深く感懐して置く〇之して君が北条ではかり馬  
軍を乗り廻さずと早く日幸東の大道に二騎馬車と馳り筆での理想たる帝國議會で堂  
々たる施政方針の大演説をやる様にならぬと祈る君もモウ必出やないからウのうらやと白髪  
かまへるをさうは是れが別小水や伊りも最後の暇乞に來てく水と相見して哄然大笑し  
て別小水の念園も念息も定めて而機嫌をうらやよるしく傳語を乞ふ

(此利宣後三日の夜記す)

幸徳 秋水

幸山眞見 三層下

△菅野素賀子より

御はかき二通有難く仰見いたしました禁止が解けを直々新聞紙へ宛てて出しました手札が符箋さして帰すてまいりましたのでは位所を記憶がない為あ心ならずも此所迄いたしましたおははやめになつたのですか奥さんや子さんは御愛りは仰さいませんか△約しは割合に共健で長リテ手当は充分にして貰つて長りますので大した害さも取付も感せずせんか△お神主様も御田主御作お下さつたり何の心此儀は心におかけ下さいますして感謝おこさいますせんよく申れを申とす△連日の公判で随分苦水してまいりました一昨日の漸く事實の審問だけ終つました。明の朝又連日の出掛けなげ水は存りません△オ、さうし申渡れすいたつぞやば差人を有難くおこす御出のお名前と見左時は何と知るか胸が一杯になりすした△念は宜先でも受けました一至此御執を湯たいとおぼして長ります△入獄の日は見送りさうなすゑに此御折がございすしたさうか定敷は借へと致すすは位所を記憶せずせんかと御存りぬ事件の爲めに絶つと遠慮と添しすした△は取をば右印に奥さんには山々御敷は借へと致すす

五月十日

菅野素賀子

去り守印帳

二三の由の片手紙のみ今折見いたしました。そりして何とも言へぬない所しおと感しおしたので床の上にて起す上てこれを著ります△連日の公判でも朝は四時半吹起す小支度をして六時に監獄を出て才判所へ来る儀有難く申すも一夫は錦の様に苦水と長り上、風を引いて喉の休むを幸ひ静養して居るうございす△私しは何だか断な分になつていば居候に御しつて居つたのですが今もお申す御執を御しつて居るに御し得る様は感じお折ります、どうせんか知れ左様い前ではございすか△ある向はどうか折ふしは便りも致す△新左左事案に就いてのけ同様有難くお申す、畢竟利しかお朋の罪でございすか、それにていとも同様して下さる言があるかと思へば私には極是取とわらひません△日々公判廷で相見の湯が其絶えなく陳述申の之法によつて私に其心仲を察して却て気の毒に思つて長ります何れの位席がございすしたさうか私しには少しも氣兼ねせぬやうには借へと致しすす私しが絶縁の通知を予審判所に頼んだのも其志を察したからではございすか、奥本

はあ、あゝ感懐家です。かう今後もお互でどうかいつまでもあつては  
心算を頼みます。直ぐア坊は唯、大寺くなられたのでおさいませ。水  
宣先を愛た。何れ、紀念の品を上げたいと先んから考へて呉ります。  
山崎さんには竹音の贈をどうぞおさいませ。今日は是れ水おかけに致  
して還ります。ア坊の贈をば大仲に△オ、それから序に△~~お~~お午代さ  
んにば入用な品は、初め一筆は通知に有れば、私から増田へは届し、  
て吳水も、探り申す。此後へ、致す。直接に交渉さ水たさう。ア  
坊増田をば届し、たいと申して致りました。

五月十八。

菅野徳賢子

4

増田子様

海ちえし、ないお正月が、集り。ア坊、左水でも、熱意から、和影の、水  
左時には、あつた、改る感、あつた。ア坊の、習慣、どうおさいませ。  
日平及、バ口平人、は、満々、三、救、方、難、了、あ、じ、ま、ア、坊、来、ま、等、二、の、人、を、除  
く、の、お、致、人、に、通、信、の、ない、私、し、は、斯、し、て、度、々、は、は、使、下、さ、る、の、は、そ、ん  
な、に、懐、しい、か、知、れ、ま、せん、△、公、判、も、愈、よ、後、佳、辛、月、申、向、宣、先、の、由

黒白相分、水、罪、の、ない、人、の、百、も、早、く、な、事、出、獄、せ、う、水、の、様、に、ま、れ、の、お  
縁、て、長、り、ア、坊、△、私、し、百、の、り、獄、申、日、記、の、や、う、な、感、想、録、を、書、き、和、め、ま  
した、す、て、ア、坊、の、信、の、思、想、感、懐、を、書、き、致、す、つ、も、り、を、す、△、は、爾、業、上、お  
供、つ、ま、は、唯、お、困、り、で、は、な、い、ま、せ、う、水、に、寄、し、し、も、申、し、ま、す、△、は、覚  
醒、の、親、徳、で、は、な、い、ま、した、ら、と、う、か、又、は、送、り、を、致、し、上、す、ア、坊、の、志  
す、と、あ、て、ば、返、し、り、た、し、ま、す、△、奥、様、に、宣、致、は、兎、さん、は、唯、大、寺、く、お、な  
り、で、は、な、い、ま、せ、う、水

一月三々

去山守邦様

菅野徳賢子

昨日、ぼろお雑煮も、教、み、も、た、ま、せ、し、た、と、水、で、火、の、気、さ、へ、あ、つ、た、ら、  
先、つ、若、氣、な、お、お、母、で、す、債、鬼、に、責、々、水、を、い、お、け、て、も、お、な、市、より  
と、等、で、せ、う、阿、々、△、熱、意、の、う、ら、う、ら、か、な、和、の、影、が、さ、ー、お、人、を、特、だ、け  
何、と、なく、心、の、改、る、様、な、感、が、一、つ、した、習慣、の、力、は、忍、び、い、ま、う、が、す、水、△  
公、判、は、痛、入、だ、も、愈、よ、用、な、し、に、な、つ、た、の、で、え、り、から、獄、申、日、の、  
振、な、一、種、の、感、想、録、を、し、ら、つ、ま、す、和、め、ま、し、た、追、想、感、想、録、悔

希望、何でも思ひ込んだりくと辛直に甘いつて還ります。何れは悦  
 に入らるゝ多くなりませう。△獄中の矢々を和めて味ひました。随分學  
 びやありません。お毛布も貸して貰ひ、湯も沸かして貰ひ、水も貰ひ、お茶も、夫  
 だも、寢るが身に必ひませう。奉と讀むのル筆も持つのル寢るも聞ふ  
 片手伺の任事ばかり中々掛たりません。録に少しやりかけた。英法は  
 んどは録音と持つのが冷たいので、ルにたふかにしついで、そつて、そつて、マ  
 ー、せい、く、下、う、こ、当、日、迄、一字で、ル、ま、く、雙、入、て、還、り、ませう。△日か、ル、か  
 う、う、と、昔、に、言、れ、ず、が、利、一、は、日、が、短、う、て、何、を、す、る、何、も、を、い、や、う、で、す、  
 一、定、の、日、俾、が、終、ら、ない、中、に、つ、つ、でも、夜、先、生、が、を、遠、慮、に、や、つ、て、来、り、ま、す、  
 △中央論、趣味、早稲田、文、学、三、田、文、学、ス、ル、に、な、り、の、新、年、に、ち、の、け  
 差、入、水、を、取、つ、た、手、紙、は、毎、日、ま、せ、ん、で、し、せ、う、か、け、都、々、で、と、う、か、恐  
 水、入、り、ず、が、は、送、り、を、取、り、上、げ、す、す、△元、々、か、ら、三、映、不、け、て、彌、生、や、蘇  
 武、の、夢、を、見、り、し、た、ま、水、が、い、つ、も、台、湾、に、關係、が、あ、る、の、で、す、去、年、八、月  
 に、出、産、し、た、松、子、さん、に、何、か、あ、り、で、も、あ、る、の、で、は、そ、い、の、と、あ、い、か、つ、い  
 じ、寧、ろ、て、長、子、を、松、子、さん、は、今、何、處、に、居、る、で、せ、う、便、り、は、お、お、い、ませ、ん  
 か、△大、抵、は、ま、婦、は、に、宜、敷、△新、年、張、り、と、は、西、産、て、い、つ、つ、し、や、い、ませ、ん、  
 (お、お、い、ませ、ん、と、は、お、お、い、ませ、ん、に、な、り、ま、す、し、た、)

一月四日

堀利彦様

首飾 須賀子

8

太陽有新うあじました。陰の光た。社屋の之義と口卒が一寸見たい様な感  
 が、し、た、賣、文、社、員、一、番、の、お、客、様、が、お、寄、り、で、一、年、來、海、文、と、は、現、代  
 社、屋、の、一、面、が、預、り、す、る、様、で、私、は、滑、筆、と、悲、哀、を、同、時、に、感、じ、ま、し、た、  
 一、と、又、明、眼、な、お、思、ひ、付、を、取、り、ま、す、と、さ、し、ま、す、  
 祈、り、は、毎、日、昌

一月十日

堀利彦様

首飾 須賀子

9

羨しい羽織の紐有新うあじました。本の俤が、お、お、い、ませ、ん、が、味、を、お、お、い、ませ、ん、  
 焼、く、く、い、ませ、ん、た、  
 水、は、ア、ナ、リ、は、新、た、な、は、勉、強、を、お、お、い、ませ、ん、  
 そ、う、で、す、水、は、盛、人、な、り、と、感、じ、入、り、ま、し、た、  
 宣、告、も、愈、々、明、後、の、と、な、り、ま、し、た、  
 山、か、海、か、世、之、人、の、運、命、が、明、し、ま、す、  
 奈、は、宣、告、後

一月十六日

堀利彦様

首飾 須賀子

10

黒世子被布一枚、綿モスリ被一枚、被布はアナリ。明着にでもして  
たさい、被は奥さんへの記念品として、粗末な裏でおすけに  
汚水で扱ります、手左水には入水ないのさか、休立直してとうかは  
取らたさい、すし、定所の手続をして、思ますしたか、トは夏夜  
のたぐい、一面、面屋にいりして、たさい

一月十九日

吉川守邦様

須賀見子

11

よくは出でたさいました、思ひかけず、お人にお月にか、りました  
を、嬉しい様な想い、様な何とも云水ない感じに打水すし  
た、もう、何時に迎へに来られても思ひ残す事はありませぬ、すの  
るでも手残は、お御になりすすからすべての事は日記に残して  
置ります、と、い、後には、賢を、舞ます

一月廿一日夜

吉川守邦様

須賀見子 12

は手残、水しく、挿入いたし、すした、産婆学校へのは通学、い  
つもながら、積極的なは努力、気には、感、神心の外ありませぬ、  
同時に、又、場、軒、中、かは、自分の、お、御、也、を、思、人、で、ア、ナ、タ、に、獨  
立、自、活、の、道、を、立、て、す、せ、候、と、な、さ、る、の、心、算、い、一、寸、普、通、の、男  
に、在、ら、似、は、出、来、ま、せ、ぬ、私、は、お、二、人、に、感、心、し、す、した、△、場、さ、ん、の、様、な  
言、を、ま、人、に、お、持、に、な、つ、た、ア、ナ、タ、は、ま、め、ほ、ん、と、に、言、は、な、て、何、が、い、ん、で、せ、ら、  
△、保、ま、さ、ん、の、丸、筆、監、査、様、見、し、す、した、よ、よ、く、似、合、ま、す、お、可、愛、さ、し  
い、奥、様、で、す、お、△、技、手、の、面、々、督、促、々、ま、め、に、我、長、短、が、あ、る、に、は、様、は  
喉、筋、昌、存、の、で、せ、ら、な、ん、て、何、の、空、ん、で、せ、ら、と、私、も、迷、途、く、れ、く、存  
じ、ま、す、ウ、ト、お、儲、け、た、さい、私、可、々、岩、の、土、の、下、の、う、る、気、氣、く、挿、入、し、て  
尻、り、す、△、一、言、教、房、の、よ、い、時、に、お、顔、を、お、見、せ、下、さい、ナ、ル、久、の、別、水、に  
△、羽、織、の、被、は、大、に、氣、い、入、り、す、し、た、は、私、を、申、し、ま、す

一月廿一日

場善子様

須賀見子

13

御西人からは病氣は在候と程し、す、梅、子、様、に、は、と、り、ど、は、挿、入、を



湯和残念にたじまず、手だ十也半片は女丈夫でせうのら何か  
西の川かたはらに知らせ下さい

再世の

園師辰之助様

園師須賀子 14

命吉の危の小有難く甚とまずもう決してこそなげ  
心配りさいますすな一夜

酔石を剣掃有り難くおぼしますところいふ奉は誠に嬉しく  
いませ、愛しくはれと申上げます

再世の

園師辰之助様

園師須賀子

15

此の出しは端吉お難くおぼします△先刻奉のはお休をす  
ましたが信暗い電燈のトビ又と水をすす△全くお難の  
は別水の時はお虫が知らしたのでございませう、私もあの時のは  
顔がはつきり胸に残りて長ります△は出獄當時の午駈ヶ花は挿

顔もありくと見へるやうです先ののは西屋も随分辛うござい  
ました、嬉しくつて辛かつたのか悲しくつて辛かつたのか分り  
ません△お相被生が半敷の脚け今水たとおふ事を  
すす一た、おわあのお難くおぼした時は奈り意おさ口惜  
に満身の血が火の様に燃へました、一鬼に角何人でも脚  
かつたのは嬉しくございませう、私一が五罪と信じて長た人  
達でせう、私はま水をゆいで半分の肩の高かりました

再世の

去山守邦様

園師須賀子

16

手あさん、うつくしいおはがきをありがたう、よくはげんす  
やうがでまるとおへて大それた字がうまくなりませう、おね  
しーまーたよ、まあさんにお上げるハヨリはおお母さんに  
でもしてまつてまつて下さい、おねのうね、おばさん、おねの  
あるにんぎょ、お水いなるハコ、おかわい、おキダシのハコを  
おねにおけます、おねさんにおお母さんにお出してまつて下さい

一、五、三、あ、さ、人、のか、あ、い、か、ほ、が、十、た、い、と、と、わ、さ、よ、な、り

一月廿四日  
場真 栞様

夏路 徳助子 一七

厭、お、天、気、で、お、ご、い、ます、わ、△、死、刑、の、相、談、先、が、半、敷、以、之、脚、つ、た、と、云  
 ぶ、兼、之、穿、り、ま、す、一、た、お、い、れ、有、且、宣、告、を、受、た、人、が、脚、つ、た、の、は、娘、水  
 一、う、ご、い、ます、吉、人、言、も、お、喜、ん、た、事、で、せ、う、危、な、か、ま、じ、り、せ、ん、か、△  
 羽、織、と、鑓、定、下、手、續、と、法、し、て、置、き、ま、し、た、代、替、を、お、す、す、△、夫  
 から、増、田、氏、へ、夜、具、羽、織、の、及、知、左、右、ら、額、二、面、二、絃、琴、一、机、支、那、靴  
 と、に、同、し、て、黄、お、様、に、今、端、書、を、お、す、ま、し、た、事、△、と、う、か、お、手、紙、を  
 け、持、参、り、て、受、取、り、は、出、で、下、さ、い、ま、す、様、お、上、げ、ま、す、△、額、は、大、板、さ  
 人、に、二、絃、琴、一、は、喜、お、に、△、夫、木、から、私、の、支、那、靴、と、水、は、在、米、の、弟  
 へ、送、る、と、思、つ、た、の、で、ご、い、ま、す、が、何、の、帰、靴、す、る、か、合、り、ま、せ、ん  
 か、今、は、半、敷、の、段、々、端、端、ご、い、ま、す、が、お、の、中、か、り、鼻、お、け、人、形、一、つ、△  
 櫛、の、微、兵、に、同、じ、する、書、額、と、書、いた、袋、私、の、用、み、て、長、た、硯  
 (お、た、は、別、に、お、の、言、に、お、に、包、で、ご、い、ま、す、) △、お、母、兄、妹、妹、私、の、寫、真、(お、母、や

兄、の、は、係、子、さん、に、は、鑑、定、を、お、す、す、父、の、は、別、に、お、け、り、お、包、み、の  
 大、き、い、寫、真、の、中、に、あ、つ、た、ま、う、に、思、ひ、ま、す、) 私、し、り、は、最、近、の、事、  
 徳、と、傳、し、た、ま、を、悪、へ、名、を、は、書、き、下、さ、い、ま、し、て、夫、と、判、決、隠  
 卒、と、ま、忘、小、り、ま、す、が、身、へ、お、包、に、し、て、は、送、り、来、下、さ、い、ま、す、ま、い、か  
 △、水、を、お、給、へ、お、私、一、は、ま、う、此、在、に、何、に、も、思、ひ、残、す、事、は、ま、い、の、で  
 送、い、ま、す、△、お、と、思、は、そ、お、く、は、危、分、お、給、ひ、ま、す、終、を、着、け、た、人  
 形、や、箱、敷、は、真、ま、ご、人、に、上、げ、て、下、さ、い、ま、す、△、支、那、靴、履、の  
 一、輪、ぶ、し、は、係、子、さん、に、△、も、一、つ、お、ま、き、と、送、り、ま、し、た、増、田、ギ、子  
 から、べ、つ、甲、の、腰、續、の、夕、お、止、め、を、お、受、取、り、さ、つ、て、為、子、様、へ、一、つ、ら  
 め、も、の、で、す、け、お、△、信、去、袋、の、や、う、な、も、の、は、す、ぐ、て、為、子、様、直、敷、け  
 危、分、を、お、す、す、書、り、た、も、の、口、す、べ、て、三、文、の、價、値、も、な、い、も、の、お、ほ  
 かり、で、す、か、ら、ご、う、か、は、様、き、様、様、を、お、給、ひ、ま、す、△、晚、夜、小、京、さん、か、ら  
 来、候、幸、徳、と、私、の、間、係、ま、り、つ、か、は、常、又、時、よ、く、は、派、し、置、き、を  
 係、ひ、ま、す、△、硯、へ、お、包、く、れ、く、も、係、ひ、と、お、す、△、寫、真、へ、大、き、い、硯  
 包、は、別、に、な、つ、て、長、た、か、し、お、水、を、お、せ、ん、増、田、ギ、子、に、お、け、り、ま、す、

一月廿四日

弟 徳助 信次子 一七

櫻 利彦 様

てアノ振申機嫌いかにとは察し中長りいきて又之意の出来る事にて定めては驚き遊一いふとちど尚何かと申遊感の事と心算せし何事も運可とは許し務とヤハ扱て永々抑借の室町時代史料し多許に大これありは返却中上を委じし物ては中教是だに水入の借とも定るべし我ひを出一還すいにつく方をさすでも中さ人でもは年すきの時あるた採の委任は持せのとはせしし中交い存を世序と申しては我れ事なる右の亦も各時には考ふ下さ水もは知置の隔へなりともは置き下し採依して務上の巻入在監申して送り先すに送ひ長りいものとちどい

一 哲学史要

一 純正哲学者

一人類学地志法

一 活地獄

一 十三五十七

一 英和新聞林

去年来一戸なるは厄介に相成い事改めし事りはれ申之れ此去来束の配慮に對しても一夫水のみが唯一の心荒一對にてい其意にもは許し我の奥探にも何事よろしくは信へ我は湯ヶ原の弘法の跡へは信せしも昔にては幸徳母と序の節宣敷は信へ我を和しよりは然とは是は信はし先はは我のみ

十月十七日

吾師 須賀子

小泉 様

ふん思ひはは迷惑と察し乍ら一筆申上先日は金丸月場さんに申托しは惠典といふはれの申上様もは危なくい口頭一言なるは世流相なりい此等の事件にて何れは迷惑相かけいふと只首寫編稿一紙の折柄また地獄なるは心配物かけ唯々淡くすれはよくはれPと云奥探にも何事宣敷は信のほと我と云幸徳母と近々は上束のよしは嘆きの程徳水で心荒しく筆とる常氣もよくては是は信はし一紙の何事よろしくは信へ我は如藤トリルに電流でなりとも宣告相受い近は是は信はしい若宣敷は信へ我と申度先はは承りしは承りしは承りしは宣敷は信い

十月十九日

弟 須賀子

小泉 様

去月一十年前九時灰色に閉す水た重い空か今にハ霞ちかいつて来

うな鉄窓の下に机に對て讀書して長りますと取締部長が誤はせ  
 やうと思ふて……と歩野早々持て来て下さつたのは何だと思はせ  
 可……まれば此も思ひの懐しきは毫の跡でございませう  
 實は私しは此の御仲に就て十六位申唯二人のみに對して  
 だけ誠に満ちないと思ひ思つて長たのでございませう一人は  
 老たる幸徳の母と存一人は申す迄もない……夫れで私は今  
 此の御手紙を拝見して何れか御者された娘が園から来り許さ  
 水た時の様などでも申すせうか實に推入様の御い味しさを感  
 しましたのでございませう△△の場さへに屋敷に届け下さいまし  
 左のを承知した時にも其様を感じがしなさいませう  
 しが實は未だ何れか多分お察な申込のをい様な心持が  
 六分位残つて長たのでございませう今は手紙を拝見しておめです  
 つかり重荷をおろした様な感じが深しうしたお難うなじます  
 どうか御手紙にも此の心持をよしくは傍へを移ひます△△今一つ  
 御に心寄しはございませうが幸徳の母とに一とお目にかけらして  
 思ふるを申したるも此に心残りは何もございませう△△私は

至極健壯でございませう本名漱典獄かよく氣を付て下さつて朝  
 鶏卯二個半乳下直御料理一四夕卯一個乳一個ぐ官銀さ水  
 て長ります夕飯の希さおけ自分でも購取して長ります先きの左  
 いたのもありお分は御申の紳士間でもございませう△△其中には大  
 判も決定して御書を經て陸の終りの幕が引かれるでございませ  
 待て長ります△△御窓の窓にさし入る日の影のうつるをとり今日  
 も暮し△△は自喜を乞

三月一日

小泉第宅より様

子守師 須賀子 〇〇

因水の身となりてより早ハケ月其は過ぎ我は行きつつか新し  
 子守を遊へて鉄窓も水来る神の影に多分の習慣めいか心の  
 改まるを覚へ氣分も今更の如く我身の顧りみられて感いと懐ふ  
 小泉様は昔御探りな御は越々年越はさ小い目と鼻の間に  
 花の如く臍げの御探りさへ知るにせなく△△の御居る方には人  
 勢強の御眼には空想の翼をひらげて彼方へ去り是此方へ馳けり

唯自ら慰めたり申し幸徳母とは逝去のよし過はる事には  
 上座の世に承りいのみにて息を止むるの報に接したく昔の如くに  
 いは臨終の採や此の環採よりは圃及びのはるにあいしが初し入  
 獄後幸徳と絶縁淡しいいども此年東母上には随分は心配  
 も初めけ又死ひて只一人の杖杖と頼む秋水の入獄にて吃や嘆き  
 のはるおいたわしくせめて一言なりとは死やうは慰めを申し初め  
 し長りしも遂には辞訣も得ず返すくも残念の事には申し初め  
 唯々天下の婦人をして革命家の母たらしむる句れまくり返す  
 の方こそなしくい然し一西より申せばこれも運命又か幸申の事  
 とも申へき平戸一夜刑に君処せらる隆の幸徳には第一に後髪引  
 のき思いの施た水て安心して大往生を遂げらるるなりと云はれ  
 ら水申し何は鬼もは気の毒の極みにい人生の悲惨地るに田圃  
 其の公判終結奉月申向宣告のよしに罪なき君の相  
 親先が晴天白日の身とならん事のみ縁り長りい事案ならは令  
 宣探へん公宣敷余は次使

小泉第3号中様

一月三日 弟 終ひる子

△幸徳秋水より

二節目に君に書く、嬉しして堪らぬ、尚ほ接見通信禁止申だけ水  
 い野事の件で特に怒つたのだ△去方丹入監の際はお家はさし君も長ない  
 し差入や何かの慮分で大に不自由と感心し、先有千代に京して世つて  
 用を頼んで長た、原々の生計費は子供を僕が送り送つてある、如か教の前途、然る  
 のを任を断つて来た別にも事情をゆ々しく用ひをい、君もモリ帰つて  
 長るから利月と偽て君に頼みたいと思つて発信する△君の目下の境  
 遇も一向から不味迷惑たうと察するけれど迷惑をうおけに余  
 にはかた、僕の一と周囲と知接する君の一家に骨痛みの後を御  
 て夏はねばなりぬ△美一僕のためは國新の老母に端者で時々消  
 息してしく水張へるして老母の方で何か急用の要するも有た印  
 は君が取次で知らしく水運運て置て置くしく水玉△差入其他の  
 の費用として別にお千代に八月程残つて長るそくだ平月を華代と

して彼女にやり方十丹君の手に委ねては水玉△△名物雑品は自分  
 て男ふから厄女とかげ日でも良い、其代り十丹の甲、三十丹正に  
 手敷直と差入てく水玉へ、強り三十丹は君の車賃郵賃マー坊の  
 草よ代りキに突てく水玉へ、書籍の上は多少を命と執は  
 水玉にちよまい△僕の書籍の箱二つ(麥酒箱茶箱)衣類とがライターの  
 行李の二つ、右に入黒塗手文庫一らが嶺雲(西大久保五五)宅に頼り  
 てあるお午代かすゝ承知して、嶺雲に交渉して君のキに引取  
 てくれ何處に置てもよく受け水玉の思に自君が保養の書つ任と第  
 びて書籍の出入してけい、或けもくお午代の方にあるから知水玉  
 彼女は、下田黒七三二で郵書は届く、誰の家か知らぬ△△△として  
 書籍は君の用ひ衣類は賣拂て貰ひたい、差当り佛英対譯字  
 書(ソレル出版)と取出して郵送してくれ疎下り△△△に任せ  
 やり注意して早く返すことくれ、事件の事、同志連神のとな  
 ど書てはいヶぬ△見えの禁が解けたら直ぐ西宮にきてくれ△我  
 面かたの残念をくれ扱なす

十月二日

幸徳傳次郎

場利彦様

昨日漸く接見通信の禁が解除されたからセッセと手紙をくれ  
 へ△扱し祝縛の降降りり、佛厄女にたつた、アノ山坂と半身も随  
 の身で引張出された君は、キツク病急にさばつたらうと思つ  
 てこどろきした。ドウが地味、病勢はのー僕とドツチが長く生  
 ずるが何題だね、印に自君と祈る△荷物を長く縛けて略々  
 迷惑だらう、師團に引取の言をいれ水玉一向運んで呉れず又  
 環に頼んでやうたが、ドウか分らぬ物では迷惑序に甚だ悔ひ  
 がカッセル出版の佛英対譯字書が(可なり厚い本で紙に封じてある)多  
 分麥酒箱にちよう左と思ふが、山本君にでも頼んでわ包で郵送させ  
 てくれたいか△△△行李の着物とがライターの二つある、其がうらな方に  
 室町時代史があるから四巻永任の二巻や、果筆をりへ返して  
 やつてくれ△△△又今じ行李に碧嶽録講義がある是れは前  
 他佛英対譯書と一しよに僕に送つて貰いたい身、即ちの出来  
 ぬ君に二十とと頼むは、此のいふ様に、根が目の境、湯  
 偏に矯、夢と語ふ△方も其中場の方で大抵在後とてくれ

やーかと男子△此節はモウ轉地先のり返つたか、近頃之  
知らせてくれ、五月朔揚久通位禁止の爲め世間が暗いな  
つて仕舞つた△且讀且吟堪差真、有衣有食却忘貧、  
滿却東馬何忙劇、憐殺世間得意人、三人なとて  
まつて強て自ら慰めるのみ

上月者

巖雲見侍史

幸徳博士中

……僕は此春未だ敗だらけで君も帰つて見て悔え警  
若らう愈々強んじ完膚なき四面楚歌の中、相持相手に  
なるのは一人もないから、君が居てくれたらと思つたが幾  
の知れぬ……考へれば考へるほど宿病の信者になる遺  
傳の因と境遇の縁を依り出す運命と大皮にはきと志の自  
由力もあつたものでほ、ほ、ほ、但一片の不葉の漂ふと似て相似  
たりだ△君の不在中に岡崎寺天小も死んだ金子も喜也も死  
だ石室は此京に京を留めた、僕等は地獄で人さす

成行し其の側り水母のも面白いはないか△昨非皆在哉、  
何怨楚囚身、才拙惟任命、途窮未禱神、死生長夜夢、  
榮辱大虚塵、一笑幽窓底、乾坤入眼新、△西鏡王望玉  
正一日千秋也

上月者

場利彦様

幸徳秋水

三甲と旭山の海邊がみつた、おけで君のりのか久しく見へないから或は  
不祥かと心配して振左が吃其の執術く(高)夜に思ひあつたうと  
手した甚だ愉快に讀んだらう(こ)は里管やドは巻着やでけり  
氣の毒ださう多忙では困人困読いころではあるまい△字者は  
二つ同時に来た一つは早速君に宛て宅に郵送を頼つた  
岡村に福来博士の心理学とカラトリ、フランスのやぶこアイラゴド  
も送る如うは東條へでも即ち賣て郵税と電報賃に(こ)承  
へ、但しアラスカは愚行見たのり一袋徳久人に見かへ中々皮肉  
で面白い△小若と定成一た、二百枚はのりの物だ、直ぐ送つけ

海から届いた、出版方法を考へてくれよ、高嶋君は、  
 どうだろう、同君がやつてくれるなら、福科、  
 盤の本も出版せよ、と、印刷は三甲に頼む、  
 (彼の手に印刷は引受るといつて来た) 日高君、  
 りたいやうな話であつた、是は、(言ひ) 今、  
 らうか、成り可く、急ぎたい序文だけ、  
 世にたいと思ふ、△千代は、夫キ、  
 去す、このうち、△は、出、  
 西屋は、早く、来、  
 で、機屋が、な、  
 成、入、く、早、  
 凡、是、教、  
 人の、上、  
 に見、  
 △君、  
 手、  
 く、△、  
 した、  
 マ、  
 君、  
 幸、  
 幸、  
 幸、

場利彦様

幸徳博士

其、  
 警、  
 ん、  
 た、  
 何、  
 う、  
 へ、  
 と、  
 務、



い毎のでもふいのが轉飛先及種々の成行は教と乞ふ三  
 申兒に申す手紙は三曲共安着る水しく讀むいりては  
 厄念感御する、夫の天災兒への手紙の中は傳言と一たがそ  
 庵いたらう七律も一つ書てやつたのら見てく水、そちから  
 毎のでもよいが、コチかりの女は制限があるのらは、  
 佐した加藤リクに申す、は親印の手紙、親印が障障國  
 許へ新聞は惠送の正多くは礼申とすす私には教示の如  
 くの養生法は急うやむ積りです、トレストイの補はけで義  
 知、今迄仰りて在界にアしだけの感化を及したとすから  
 川出をい先生です△カ島龍をり翁に申す(夫東行三  
 伸)此世をく久しくは言尋罪、本年は非常の不  
 順では健康如何とて書し申して長ります、しは安事おえ  
 氣は祿心と乞ふ△櫻兒には字書と心此子、セゴアデー  
 ドの三母は未だ庵かぬだらう、唯、何れも左の務意は徹底し  
 てるもの、郵送は何にらるか分らぬ、は面倒だが是も最  
 初の君の責任を承けて書取らせてくれ、友す水は

直にる逢ぶ△諸君の手紙を見るの感興は新中ノ雜誌  
 同様地に待つ△水月の太陽と轉む

三月一六

櫻利三様

孝徳坊次一印

此れ夕の手紙が難う僕のお母は少し正し知があるやうだが、かどうして  
 僕の様な豚児が出来たう馬鹿な児程可愛くといふから、はは  
 出さばいで長ても餘程とたへて長きに違いない帰園してから  
 キリ病もぬが出るだらうと書して来る、何しろ七千だからぬ、鬼に  
 南蛮年か母の壽をを錦めたかと思ふとかなるぬの病  
 みと愈する△僕の手紙は為みさんが抱て置て置  
 水たうう、月たうおと具た、美べいじが、ないのて、  
 行本には甚だ困難だらうが紙質の厚みと摺り、  
 紐を正アラクするなりして何れも無敵頼下、アしが印  
 るのは今の僕にセメテも、業の、一つたる良家の斬先に  
 私を兎を振い上げられ張るが、其成長を業人である親心は

人なたうう喜してく水鏡△僕が三思堂の一定の前位  
 友如王あす角の拒々拒四本で圍んでる孰れも枝を印流し  
 左の印あとなげけたおこやう半臥膝座してると枝拒が枝さし  
 かゆし葉をひ落し左前腕があらうくと目に浮んで、兼事  
 身は浮世の中にある男ひさする△地植物も宮殿の棟  
 梁とならぬに、冥るるの空めとなつて朽ちて行く、必死何の  
 因縁を△とんたんとを考ると樹の中も山中も強くと何の異る  
 百し樹石より多の音が思ひあるだけありし葉を△載  
 酒江御既隔年、囚衣今日又因縁、個中消息有誰會、獄禪  
 禪兼病禪禪、△如山や大杉にのたみ命をやる代りに千手  
 並かけとつてく水△俣子君のりパロール、千手しウオレテ並借り  
 て長たのり大杉に返してく水△

其の  
 場利彦様

幸徳傳次郎

度々端書新おう、十三朝うと此口見た△連りの公判

て多少覆水たけ水と、儼然にもスチームが通つ長て暖いし差  
 一色々な顔と見、意葉之圃くおけでもドコに應答積にる  
 の知れぬ、習習の徳先には此向にも気の毒でなうなわけ水  
 と又或時は芝居の小説を見事撮て長るやうな感心かするま  
 もある、海まはらけ水と事實たのり仕やうがないの三田文学  
 はよく気が付たぬ、僕はある人な文学がすきた、又見當つた  
 ら送つてく水△、函月も後ホまたのり送つてきてほしいと  
 んだの除審判事と通して函月の傳言は聞いた、去る月  
 仲旬のことだよ、何にして西白いやつさの去る△は故あつて  
 知れしたさうたぬ、誰れ故あつて切長するたうと喜し  
 て長た、併し故のな顔も一つあつたの千代子に告ぐと、  
 千手△の毛残皆な着た、禪律と朋友△は長いので暖く  
 よあつた、おかけでせいの狸のゆを纏はるに帰んだ、縁はがさ  
 は痛く、私のみでなく、大石君や木村君も夢中でも  
 多いから身を知つた人に慰問状をあけあさい、此のから  
 久し振に公判が休みだけ水△、本が、去る△の伯母△△へ

江山のいながら、今は市身へは別れのいず、堺君や宛の中に  
尋き入る縁ばかりは墨縁でなくとも彩色しててもよ  
らふ縁としてほ還入らなむか去張面縁として還入るのだ  
成るべく暖い処へとしたらうものう。堺君へ分判でむも  
気の毒なやは糸履士諸君だ、利邊にもはらぬとで、  
丸つがして、おのふ件は皆抛擲し、おまけに世間のは  
睨みれる、随分骨道成たとも憂るだらう、諸君によろし  
く感御の意と信つてくれよ、  
幸徳傳中

堺利彦様

幸徳傳中

幸徳は死ぬたうり〜と書け水ながら、また生きたる  
相更らぶ病を食てる病人だけ水が意気は少しも衰  
へない、僕はやうな事さうしは撲殺でもせぬば病氣  
では死なぬか、知水やないか、  
再至の手找ぬる水、  
續た、二首の歌面白かつた、  
一之キは美しい生活だ、  
然して思つ養ひつ救へ、  
法網に觸れないうやうに  
懐して〜  
△君の賜の碧叢録撰の帯して居る中々面白  
い併し別に見性、  
たいな、  
知水はなに、  
そや地獄に墮ちて  
るのう、  
此と居る、  
知水もたい、  
ソへ来ると氣無なるん、  
又  
手、  
残さ〜  
水、  
玉へ

おのり高様

幸徳傳中

此はゆた、  
久しい揺れ通位の禁で丸で暗夜を人島の中は長る様  
な心措き地であつた時に、  
初めて君の着入を愛けた時は、  
嬉しうた  
よ、  
食物の味より、  
君の姓名を言た、  
残れを、  
君に居つたやうで  
息が、  
懐快を感じた、  
奈し申れを、  
中々の堺か、  
外套のこと、  
正言  
て来たが、  
ア、  
ナ、  
糸履で、  
何し、  
水は、  
去んで、  
君に、  
遊、  
是、  
する、  
の、  
僕、  
は、  
愛、  
こ、  
え、  
氣、  
だ、  
の、  
う、  
は、  
あ、  
と、  
乞、  
ふ、  
の、  
度、  
々、  
通、  
候、  
〜、  
只、  
水、  
玉、  
へ、  
大、  
概、  
な、  
手、  
紙、  
は、  
届、  
く、  
先、  
々の、  
端、  
昔、  
も、  
愛、  
取、  
た、  
の、  
君、  
が、  
失、  
業、  
一、  
は、  
せ、  
ぬ、  
の、  
と、  
常、  
に、  
案、  
一、  
之、  
長、  
る、  
謹、  
懐、  
して、  
勤、  
め、  
玉、  
へ、  
の、  
身、  
さん、  
に、  
も、  
宜、  
敷、  
〜

三十七

去山守邦様

幸徳傳次郎

去りばくし振てと多しの手抄ありのたぐ揮々、は定の賑かなは  
くらしの加援目に見るやうでく水しく思ひます、た、産婆學  
取へは通ひの思ひます、いつも病がら新左なる方面と断えず  
進取開拓せりやと致腹のむりです、年は取ても氣さ入  
若げれば同じとせず、あなたも勇氣と健康とで進めば成  
印は疑ひありませ人の拓山良もイッモソキで鐵構です、但し  
マアさんと角力ばかり取て長て、肝心の職業の方を打擡て長  
りはしませんか、因人根性か振けない中に大に戒飾して御のせ  
るがよいのです、あなたも處の傍りて長左陶器の才鉄甚  
臺所道見ゆしは午駈ヶ谷引拂の節増田へ譲けて置きま  
した、先々増田へ年試ちて置き置いたから席の印は引取  
下さいますか、また水のり私りの煤竹の三段の書棚が二つ、是  
も同様に存ります、場見のは用に立てば先業ですの公判ては

月に柳水ぬのは殊急でした、係し多御力のへく無水左様と  
見ると信聴禁止の方が却て水のつたかとも思ひます、毎日後  
言の顔を見るのが嘘しくもお水は氣の毒でも立ちます、眞々半  
やうで、頭の白髪は人のぬれともす所のチチとて、セメラ山  
な耳垢をけいで取て貰ひ度いと思つては彼先同志の後法は  
嚴禁たのり後に袖手傍觀してゐ次第です、チチ願ひしてやつ  
て下さい、私の日テールの馬直は汗顔の至り、アしは私の氣  
取立てはなく馬直のな午賀の意近でアチに氣取下さ水たの  
です

甥若孝子様

幸徳傳次郎

密航回居の時は老母の件でチチ弱て長たが、新年に入て全く健  
復した、イッ迄児女の泣きするでもないからね、△時が女水は又チ  
ヨットした物と子母て見たいと思つて許可だけ得た、祝ては其

筆考にしたいが、平氏神学の伝承を互急送つてくれないか△た  
 しか  
 新い本でカ一カ以後の進化説の發達の沿革を考た本が在つ  
 た、或は巖雲の方に残つても、知水ぬが、あ水は是非水もよとして  
 く水玉へ△筆致の筆末卸便を三十通程のみ一時に受けた、珍ら  
 しいのは、本筆道別君の弔詞同即主人の歌などだ、新選君  
 のりも新選君が来た君の端書も新佛教も皆う水一く強だ  
 、強行をやめて強選で年内を展ふのは君の辭た△千代子に  
 筆考差入水の経緯を申さしなから、若し筆がないといふなり西  
 側でもだが君が何處かで微養してやつて吳水玉へ△巖雲に申  
 す、軍連の弔詞及び荀子難あり、荀子は即刑も装釘も申ん  
 之紙たね、二十年目に此書に對し強と束知の考を呈見するの  
 感のある席海の荀子親教傳した、席が在つた、韓非子も送つ  
 て水存りの△千代子に申す、臨園筆のみでは分たか、移心廣  
 法を知りたけ水と精神庵法と、や水も一區筆は廢してし不養  
 せしともよいといふのでは無い、寒凡に者水は痛むのは当然で

す、濕氣と寒氣とは元も悪いので、イリテ移神論法として一  
 じの養をとりと打とわしとは何れもなごめり、防寒は元も必要で  
 す、和しの腸も冷ると愛いかに鬼に角是水位で持て居るのは氣を  
 養て長多のうたと思ふ△木下良に申す、君の紹印な平文には  
 スツカリ注のす水てしまつた千感万謝

一月十日  
 幸徳傳次郎

場利彦様

ナリヨ徳を  
 二カ附のは手紙、吹口接手した、右は手紙を監獄(僕)の長を申す、あ頃、監付東京監獄  
 とし、そので、手紙を監獄と子園右を認日は別に在る)であつたのと、木の皮は換園が  
 休めで在つたため、順送りには遅くならぬと思はれる、基督論は去  
 年豫審院終結後、公判開廷迄の間はトウヤラコウヤラ脱稿した、出版  
 の事は新佛教の高島米峰(若かり系ケ六)が一切り受てく水左二月下旬  
 發售したいといつてある△君が序文と書てく水ると非常な嬉しい  
 湯河原の駐在所。別水が在別即死別であつた、アノ筆りの光景野  
 野として永く眼に在る、是非君の一文を考つたけ水と僕との親交

其が、關係とかいふので思ひ、四方から既すれるやうではと、差控へて居  
 左、併しモリ由題は片附左のりよか、互急に考て高島君  
 の考へ、却送しそく水、下い、此手紙と同時に彼水にも通じて  
 置く△猶新用法などは刑罰、被差人、や犯罪人に同情す  
 るやうな記事は堅く禁じてあるか、出版法にも同意味の條項が  
 あるやうと思ふ、序文の文字で法網に觸れないやうに注意して  
 くれば、△健康は寧ろ、病氣はどうか、寒くそにしくつて  
 弱るたらう、僕も常外えゝ事だ、病状は依然如旧、おれが、未  
 だ、望は思はあふし、衣服は、毛布など、毛布などの  
 防寒之具もあるし、そんなにつらうはない、大いなきこと  
 のおは、何不足はない、學隠長た、殊に、雜誌が讀めるので  
 親友い△少しづつ、隨筆を書き、たゞこみ多積り、時々の水は  
 小冊子か出来るか、△先にも前記の序文正  
 是、此頼む、十分に考てくれば、

山嶺雲病見

村水 囚人

多つは善人、業へとも悪く減り、めでたり、くの大因で、僕も重  
 荷を卸し、左様だ、今日は、多心ゆび、わか骨休め、く之長  
 る、是あり、敬か、敬週向か、知らなきか、讀める、大け、讀め、大け  
 る、大け、考て、そ、て、元、素、也、に、復、帰、す、る、こ、と、に、し、や、う、一、切  
 人の世の面倒な義務も責任も是で解除となる譯だ、〇但  
 だ、覚悟のなかつた多勢の神を、殊に、知い子供のある人や、世間  
 と、知らなき青年などは、此例に、し、守、の、毒、で、な、ら、な、い、が、然、し、ド  
 うする事もあるか、難破、船に、乗、を、せ、た、と、で、思、つ、て、敵、念  
 して、世、界、の、外、は、な、い、若、し、君、等、も、出、来、る、大、け、認、め、て、や、つ  
 て、く、水、一、塵、一、毫、の、生、滅、も、全、く、之、意、義、で、は、あ、る、ま、い、又、何、等  
 かの因縁に、なるの、た、ら、う、〇、甚、甚、論、が、出、来、た、ら、加、藤、山、白、水、  
 安藤、細、郎、伊藤、(病、註)、本、下、田、園、諸、君、と、磯、部、今、春  
 村、花、井、鶴、尺、平、出、の、五、年、後、士、に、直、先、に、送、つ、て、く、水、に、  
 園、之、の、親、戚、八、十、部、は、〇、千、代、に、名、じ、て、夫、々、送、ら、せ、て、く、水、に、  
 山、園、之、の、事、務、所、教、務、所、の、各、一、部、で、贈、と、正、転、ふ、忘、

水ないぬに形人び置て、大杉、石水等の内輪の諸兄へは宜敷  
 君の取申ひと乞ふ○平民科学とサイエンス、オプ、ライフ早  
 連に難有う、勉強して書くと恩消化を害するから日  
 に二三枚乃至四五枚退屈な時に書いて長る、短い句でも  
 痛楚は避けたいからね○僕の手抄の抜き書き迄君を  
 煩しては、実に済ない、け水の外に何様もない、只感謝す  
 るの外だ、出版届けは直轄月君に送つた○未練だらう  
 が今一頁告別の西暦を得たいものを、直轄したい用事  
 あるので○是から手紙の度に最後のつもりでかく宣言の  
 望り

堺 眞兄

秋 水

太陽臨時増刊始一かつた、本文は去したものでないが、前後  
 の新版圖書や洋書や雑誌や小冊物や銀行会社や商業など、資  
 金のペーじ互見ると之を母目で東京市中に出た様子などが  
 した、そして今の思想界の要求、物質を流の程度など

未だでアリくと分るのだー△本下兄に申する、君とは神の  
 方まで時々喰い違ふけ水、終つて僕を解してくわゆる者だ  
 から、君の手紙を見るに母に斯なるのは、教訓と慰藉  
 として得る正感耐する、今度の入道は非常の苦悶、非常の  
 修業で、未だ當て知らなかつた人との味を嘗め得たや  
 うな苦痛のする、終つて踏破玄関の境界は我等  
 親根中々及びもないとで、此を年と共にイラカブ、目鼻の  
 うを棄ししむのみだ、ドウか君の近來大悟の消息を承りたく  
 思ひ、一々△セッセと手紙をよこしてくれ

四三年五月廿六日

幸徳

堺 利彦様

雜誌有瓶、太陽は矢張り許で有たが、新佛教は毎海通過した是  
 けで凡そ在阿が明るうなつた○貝塚君中々味を嘗め得たや  
 びア、輕妙な筆致を見て胸のすくく他が、一々○新佛教徒の今日  
 の境過は、も略ぼ察せられ、僕がキリスト論は能全たる宗教史研究

で園より禁裏の心水はなないけれど、重羅人の著書だとソウウで出版者が近河から睨まれて迷惑に悩むとでもあつては毒の毒だ、僕の方はどうてもよかり其處は君の考へで人の迷惑にならぬやう、怪しむ理のやうに申すつてくれよへ、米峰君に手紙出したけれどあつと遠慮してその如くはなるとが大分快行と見へるね、なつては飯が食水は結構だ、僕もなつては長るけれど是は隆義なくも水たのた、血力でなつて寧ろ他カ宗を○大杉君に申とける、先日は来てくれで嘆しかつた、弟に会つた様なまかした、君が吃りて十分の物が出来たのが残念だ、手紙を呉水玉への公判で傍聴序を見届したが知つた顔は極めて少ないハ、一と思つた友らば(四三年五月一)

場利彦様へ

幸徳傳おち

愈々四年の一月一日だ、致れ子と見上げると青い空が見へる天をまがぬので世間は怪を懸かだらう、大の争かたの監居は依然として陰字を、墨も衣履も鉄の如く凍て長る、毛布を膝に危く踏り、今

は世にこそ母を懐か△母の死は僕に取つては寧ろ意外ではなかつた意外で△だけには猶ほ花い、去る月未、良が伴子で西会に来た時に、思ふ終にほきめし詠りもしてくれなう程にもなつたらうが一滴の涙も涙もなげすぬ近に耐へて長る事さは、非常に骨身に徹するたに意いまい、イクラま太でも帰国す水は吃を病になるたうと察して、日夜に察して旅石のは矢吹申とた通りだ△八りの休憩時間には庭の片隅で花井君や守村君がまっ毒さうな顔して先け知らしてくれな時は、扱こごとと思つた事りで、ドコをよとしたか覚へぬ位だ、嘘を見苦しかったであらう假監へ降つて来て教偏の熱涙が瀾の上は流すた、僕は如欲瀾ばかりなると△君も知つてゐる、最後は別水の折に、その目にはからぬかもし知水ませんと僕が言ふと、私もさう思ふて来たのだよと答へた、ドウかおかつたとお大仰にといふと、お前もニツカリしてお出で、と言つて去ら水た、音響が、今もアリ〜と目に浮んで来る、考へて長ると涙か止まらぬ△其後僕が降り、手遣ふも人だから、いつも健康だ健康だと言つて来た、訃報が来る三日前には夏を左手扱ひ、代筆ではあつたが、お前の前途を見届けぬ



中は病争などには存らぬかり、ソナと心能せぬと永と遠人たり  
 詩を依つたりして樂しんで長なさいと尋いてあつた、僕にマ  
 病争れ出なかつたかと喜んで長な時だから、若し又自殺してはな  
 いかといふ疑ひがふくと起つたのを△僕が日禱事件のやうな事  
 で入獄したなら、假令輕罪でも母は直ぐ自殺したか、知れぬ  
 今度の大罪にも後悔非常の苦痛を感じたであらうが、併し  
 是れは僅の正屬から起つた事と一点私利私欲に由てなかつた  
 とおけは母に諱してアキラマてくわさうと思ふ、單に之を臥かた  
 とか非親したとかで自殺するとのないのは、僕もは善く知て居る  
 △萬々一ホトに自殺したのなら、其理由は一つある、即ち僕をして  
 マての暑期に際してせしめたい、生殘れる母に心とひのすれとせ  
 しき事練らしい怨念に出てないうやうにとの苦夏の極に外を  
 うないのだ、此理由に於ては或は又に伏すとも事と仰ぐと  
 為しおぬない事質であつた△母の生家は郷士だが庄やたの家の  
 で其父が即ち僕の外祖父は可なり学問のある医師であつた  
 ナ七にして僕の家は嫁し三十三歳にして官場となり残された十

三と五つの子と二つの男の子、四人の可憐な若者の為めに  
 固く再醮の勸めを拒んで四十一年同様の生涯を送つたのだと  
 して、其時二才の子が即ち天下第一不孝の子に成つた、僕なのだ  
 △ア、何もう運命なものを悔むに及ばぬと心に苦しく身休  
 正に損ふのは最後まで僕をアベコベに慰め仰ましてくれ、母の  
 志にも背くのだから力めて志水やうくとして居るが、決るに女  
 なき、秘窓の下にボツ然として居る身には鬼もすれは胸を衝  
 て来る、我ながら弱い男を詩の一つも来た

辛亥(?) 歳朝偶成

嶽裡注居先此裏

何知四海入新陽

添得罪人愁緒長

大晦には蕎麥、今朝餅をふたのだ、たゞ狂詩のやうなだけ水かふ境  
 ながら仕方がない△長々と愚痴ばかり並べて寝なかつた、許して  
 く水、もう浮世に心残りは微塵もない、不孝の罪をけいで僕は何  
 死に値するのだ(四十四年一月一日)

堀利彦様

幸徳傳次郎

……相愛と神経痛で悩むさうで市靴儀穿し入る……△扱て  
 市甲越のに身の一と事件は何事か、甚だ繁じらるる……昔等も今迄  
 市身に對しては、我儘であつた埋合せに、如何様にもしては身が幸福な  
 様に、満足するやうにと祈るの外はないので、我々の場合如何に堪着なく  
 願成なく言つては……△書物は見るとも堪えぬが、気は比身と同  
 様、病苦と存つて日々腸に居るのだから先。頼人を錦入羽織と毛布と  
 ニヤッ股引は早く欲しい……△養生書一△我等はマダ強た！(四三年  
 十月三日)

師国千代子様

幸徳傳次郎

先のは久し振に面会が出来て満足だつた、但たは身の病苦等のさう  
 ないのを西のあたり見れば殊に胸と痛める△病苦には心配苦が  
 一番だ、殊に神経性の病氣は右うだ、薬も必要だけれど、主として自  
 然療法とか精神療法といふ心の配苦等正しくせばなるとは、  
 絶対になくするは聖人でなくては出来ぬが、修業次第でいろいろかゝれる

正か出来る、そのと神経の過労を際止む之に海鞘する分量の血液と  
 節約して消化機、其他の御事とよくするうだ、何れも善事に樂天的  
 にやつて行くを△夫から神経の休息には毎々一と静養してを  
 念想になつて見る、夫れには柔海丹田といふ下腹部に心を落つけて  
 氣を散せぬやうにして出入る息を一つと数へて見る和めは種々  
 難念が起るけれど日を経ると愈々三昧になること出来る  
 、斯く息の二三石も数へる間静養した後は血行がよく消化も出来  
 ると休ん軽く感ずる禪家などに長壽法と句けてやることだ△是  
 を実行すればキツト血行がよくなり病が軽くなるから試みては喰なさい  
 我が心と筆での忠告だ(四三年二月廿六日)

幸徳傳次郎

師国千代子様

昨はよく来てくわすした、何より西の縹帯がとれて顔色もほんして  
 病人らしくなつたので大に喜んだ△は身が痛くは神経の過勞さ  
 せなりで血行をよくするやうに掛けてさへお水ばかりよくならず、今

一寸先きは高たのら、同じマ、にならぬ<sup>位</sup>なり、多る<sup>る</sup>を善い言に解<sup>解</sup>釈  
して一日一刻でも楽しい希望と持て過した<sup>了</sup>が心にも身体にも得<sup>得</sup>  
ず△△ヶ月目で此頃一二回刺身を食べた、秋<sup>秋</sup>の果<sup>果</sup>を食つては手<sup>手</sup>に  
なると思ひ、新<sup>新</sup>麩<sup>麩</sup>や教<sup>教</sup>の子<sup>子</sup>を食つてはもう出<sup>出</sup>た<sup>と</sup>成<sup>成</sup>する、此夏以来  
鮎<sup>鮎</sup>ル<sup>ル</sup>食<sup>食</sup>た<sup>た</sup>松<sup>松</sup>茸<sup>茸</sup>ル<sup>ル</sup>食<sup>食</sup>た、錦<sup>錦</sup>菜<sup>菜</sup>は胡<sup>胡</sup>瓜<sup>瓜</sup>、栗<sup>栗</sup>、薄<sup>薄</sup>菜<sup>菜</sup>、茄子<sup>茄子</sup>の時代から此頃  
の菘、大根<sup>大根</sup>まで、菓<sup>菓</sup>物<sup>物</sup>ル<sup>ル</sup>林<sup>林</sup>檜<sup>檜</sup>、梨<sup>梨</sup>子<sup>子</sup>、栗<sup>栗</sup>、柿<sup>柿</sup>、蜜<sup>蜜</sup>柑<sup>柑</sup>と新<sup>新</sup>しい物<sup>物</sup>が這<sup>這</sup>入<sup>入</sup>  
る毎<sup>毎</sup>に海<sup>海</sup>邊<sup>邊</sup>の<sup>の</sup>仲<sup>仲</sup>物<sup>物</sup>の移<sup>移</sup>り行<sup>行</sup>くことと想<sup>想</sup>りやる、小<sup>小</sup>供<sup>供</sup>の時<sup>時</sup>に讀<sup>讀</sup>だ<sup>だ</sup>依<sup>依</sup>娘<sup>娘</sup>の  
山<sup>山</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>に花<sup>花</sup>紅<sup>紅</sup>葉<sup>葉</sup>で村<sup>村</sup>屋<sup>屋</sup>の四<sup>四</sup>年<sup>年</sup>と想<sup>想</sup>ふ美<sup>美</sup>しい文<sup>文</sup>があ<sup>あ</sup>つたが吾<sup>吾</sup>等<sup>等</sup>は毎<sup>毎</sup>日  
の差<sup>差</sup>入<sup>入</sup>糸<sup>糸</sup>当<sup>当</sup>が唯<sup>唯</sup>一<sup>一</sup>の曆<sup>曆</sup>だ○毎<sup>毎</sup>日<sup>日</sup>のあ<sup>あ</sup>しづ、妻<sup>妻</sup>つた材<sup>材</sup>料<sup>料</sup>で妻<sup>妻</sup>つた配<sup>配</sup>合<sup>合</sup>  
妻<sup>妻</sup>つた料<sup>料</sup>理<sup>理</sup>の糸<sup>糸</sup>当<sup>当</sup>の未<sup>未</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>日<sup>日</sup>、日<sup>日</sup>々<sup>々</sup>新<sup>新</sup>開<sup>開</sup>と見<sup>見</sup>る糸<sup>糸</sup>当<sup>当</sup>で衆<sup>衆</sup>人<sup>人</sup>で待<sup>待</sup>  
てる、西<sup>西</sup>向<sup>向</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>か△獄<sup>獄</sup>中<sup>中</sup>で一番<sup>一番</sup>回<sup>回</sup>る<sup>る</sup>は衣<sup>衣</sup>類<sup>類</sup>の破<sup>破</sup>れ<sup>れ</sup>びと縫<sup>縫</sup>ひ  
とだ、針<sup>針</sup>は糸<sup>糸</sup>当<sup>当</sup>より遙<sup>遙</sup>に重<sup>重</sup>し(早<sup>早</sup>三<sup>三</sup>年<sup>年</sup>五<sup>五</sup>月<sup>月</sup>六<sup>六</sup>日)

幸徳傳次郎

師岡代子様

..... ○ 昨夜、ニヤツ、ハニケナリで流して是入水、靴有る間に蓬<sup>蓬</sup>たうとて

悔<sup>悔</sup>しい思<sup>思</sup>ひをしたらうと察<sup>察</sup>する、公判<sup>公判</sup>の前<sup>前</sup>夜<sup>夜</sup>枕<sup>枕</sup>に着<sup>着</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>する時<sup>時</sup>に妻<sup>妻</sup>  
取<sup>取</sup>つて、仕度<sup>仕度</sup>十分<sup>十分</sup>に出<sup>出</sup>来<sup>来</sup>た<sup>た</sup>ので大<sup>大</sup>に即<sup>即</sup>かりました○私<sup>私</sup>は益<sup>益</sup>々<sup>々</sup>え<sup>え</sup>まを、公判<sup>公判</sup>  
の完<sup>完</sup>結<sup>結</sup>存<sup>存</sup>慮<sup>慮</sup>へ終<sup>終</sup>日<sup>日</sup>腰<sup>腰</sup>掛<sup>掛</sup>けるので、病人<sup>病人</sup>は日<sup>日</sup>數<sup>數</sup>が<sup>が</sup>続<sup>続</sup>け<sup>け</sup>ばあ<sup>あ</sup>しは腰<sup>腰</sup>水<sup>水</sup>が  
が監<sup>監</sup>獄<sup>獄</sup>では病<sup>病</sup>争<sup>争</sup>に<sup>に</sup>対<sup>対</sup>する糸<sup>糸</sup>当<sup>当</sup>は十分<sup>十分</sup>に行<sup>行</sup>使<sup>使</sup>してそ<sup>そ</sup>水<sup>水</sup>田<sup>田</sup>(親<sup>親</sup>中<sup>中</sup>にして下<sup>下</sup>さるから  
決<sup>決</sup>して要<sup>要</sup>く存<sup>存</sup>る様<sup>様</sup>存<sup>存</sup>とはあるまいと思<sup>思</sup>ふ○詩<sup>詩</sup>の位<sup>位</sup>文<sup>文</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>水<sup>水</sup>と人<sup>人</sup>新<sup>新</sup>しいのは  
出<sup>出</sup>来<sup>来</sup>ない先日<sup>先日</sup>細<sup>細</sup>師<sup>師</sup>君<sup>君</sup>に言<sup>言</sup>つた<sup>た</sup>とお<sup>お</sup>目<sup>目</sup>に<sup>に</sup>け<sup>け</sup>やう、世<sup>世</sup>年<sup>年</sup>別<sup>別</sup>盡<sup>盡</sup>  
読<sup>読</sup>書<sup>書</sup>燈<sup>燈</sup>、今日<sup>今日</sup>空<sup>空</sup>際<sup>際</sup>痛<sup>痛</sup>骨<sup>骨</sup>接<sup>接</sup>、石<sup>石</sup>臂<sup>臂</sup>天<sup>天</sup>高<sup>高</sup>穴<sup>穴</sup>規<sup>規</sup>億<sup>億</sup>鷲<sup>鷲</sup>、鏡<sup>鏡</sup>窓<sup>窓</sup>風<sup>風</sup>冷<sup>冷</sup>悵<sup>悵</sup>詠<sup>詠</sup>  
蠅<sup>蠅</sup>、幽<sup>幽</sup>居<sup>居</sup>恰<sup>恰</sup>山<sup>山</sup>中<sup>中</sup>寺<sup>寺</sup>、跌<sup>跌</sup>座<sup>座</sup>自<sup>自</sup>疑<sup>疑</sup>物<sup>物</sup>外<sup>外</sup>僧<sup>僧</sup>、偏<sup>偏</sup>喜<sup>喜</sup>人<sup>人</sup>情<sup>情</sup>隨<sup>隨</sup>處<sup>處</sup>見<sup>見</sup>、於<sup>於</sup>  
吾<sup>吾</sup>獄<sup>獄</sup>吏<sup>吏</sup>亦<sup>亦</sup>親<sup>親</sup>朋<sup>朋</sup>、(四<sup>四</sup>三<sup>三</sup>年<sup>年</sup>五<sup>五</sup>月<sup>月</sup>六<sup>六</sup>日)

幸徳傳次郎

師岡代子様

..... ○ 新<sup>新</sup>字<sup>字</sup>には暖<sup>暖</sup>いとあつた<sup>た</sup>が、そ<sup>そ</sup>水<sup>水</sup>は裁<sup>裁</sup>判<sup>判</sup>所<sup>所</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>て、夜<sup>夜</sup>明<sup>明</sup>前<sup>前</sup>  
へ来た<sup>た</sup>寔<sup>實</sup>母<sup>母</sup>が鉄<sup>鉄</sup>碯<sup>碯</sup>子<sup>子</sup>に差<sup>差</sup>込<sup>込</sup>んで居<sup>居</sup>る時<sup>時</sup>分<sup>分</sup>に起<sup>起</sup>きて、切<sup>切</sup>水<sup>水</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>うな水<sup>水</sup>を  
の<sup>の</sup>水<sup>水</sup>で<sup>で</sup>洗<sup>洗</sup>う時<sup>時</sup>も、霜<sup>霜</sup>白<sup>白</sup>い大<sup>大</sup>既<sup>既</sup>を箱<sup>箱</sup>馬<sup>馬</sup>車<sup>車</sup>で曉<sup>曉</sup>の<sup>の</sup>風<sup>風</sup>切<sup>切</sup>て中<sup>中</sup>ら水<sup>水</sup>で  
行<sup>行</sup>く時<sup>時</sup>も、寔<sup>實</sup>母<sup>母</sup>は鉄<sup>鉄</sup>や手<sup>手</sup>足<sup>足</sup>が<sup>が</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>を、体<sup>体</sup>は綿<sup>綿</sup>の<sup>の</sup>

正、江山を眺むればかげで空くは空、法廷から出ると急に温気が盡く  
為めたか、午ヨツと風を引いて咽喉が痛かつたが三ヨツとして直ぐはつた  
去張瀉を食いこもつと欲む長もけ水と、えんまはよい、先日も花井  
君が「此は気分がよい」と見入てえんまの水、二十餘人の列座の彼れ年中君  
の血色が「一番よい」といつて長た、成程左へ聞けば多くは營養不良な  
顔としてある息子の毒だ、私などかマーえんまのよい方たかりー  
(四十二年五月廿六日)

師団千代子様

幸徳傳次郎

年未半娘の休暇中の郵便が溜つて長たので、昨、端書封書取寄せ  
三十通程一時に妻宛つて大分賑かに感じた、其多くは母上の計り封す  
る布詞であつた、不取敢たの人々に私の信をなりとして端書出して  
置てし水 君へ、此境、此情に於て、亦馬のなまゆ冷るしきり海息、  
強に鬱憤を用くと得たり、享禮厚御す 君へ、所布詞有靴う  
、平色直い馴水た場所の畫葉書なうのしく挿見しつた 師団即ち、  
之し振に師端書愉快に挿見、病後の根を養專一、か養と師酒玉

祈る、稚子夫人の新仏和歌親方頂致、才調敏敏う是、エニヤク只千ヤが大  
筑の圃に立つとは僕の渾く喜ぶ所 君へ、此手紙読つて  
涙数行なる、一々僕の圃んと欲する所、又君は人と欲する所、所謂  
他人有心我忖度之者乎、僕脚か書を張り道と聞くと死意た心に介  
するなし乞幸に安喜 君へ、師見舞親方、此手紙は大兄に累及  
何とと瑞水然と遠慮して所を片になつて、男子師を歡天喜地 判誤は  
あつて心利執行書では、彼夫人同様へ行過で、差入は自他たのり、弟等は依  
然引續き入水やノ排込み置てアさい、去来るなり洋食を一皿、隔り夕食に  
欲しい、偏敬の日に入水水はなぬ、是のらば千ヨツし左著述とする積りた、文  
三章之書くには、イッモ斯なからぬ血を絞るから營養を多く取り由はな  
ぬー(四十四年一月十日) 幸徳傳次郎

師団千代子様

先日は親方、面会は用務を早く辨するのみでなく、十分でも十五分でも、  
官東因人と云ふ關係を故水で、相手と平等の地位に立ち自由な言を  
言語を盡すと云ふことが、ドコには象持がよいか知水ぬ、是は血行を

非定に活潑ならずしぬ、一時に全身の機關を仰みずのたのみ、一室の面屋  
は強んご一度の入浴と因じ功効が有る、鏡の幽長して居る者ぞなくば此味  
は分らないたゞう〇元旦には、いつかの晝辰の外に、朝、餅の肴が這入つた  
祝儀の品々を取揃へて美し以凝つたぬめであつた〇母との事で大分アチチの  
糸筒を寄せられたゞと、罪を憎んで人を憎まずといふ訳だゞう、総て因  
と許されたゞと、夫妙く返礼端書と、申身がゞ出して貰いたいと思つてる〇先  
〇話した文庫の中に、北民先世の手紙一紙束と、外にうゝ打した手紙一枚、  
書画が二枚だかあつた、それも其儘散逸すべし惜いから、申子息の手紙係者  
して下さるやう私の傳言たといつて未だ人まで送呈して是れなにか〇監房  
は中々寒い、併し別に飢れぬしひかない、母とのとも力めて之を承るやうにして  
居る、判決迄に今、五位面會の機あらんとして望む

(甲四年一月四日)

幸徳傳次郎

師岡千代子様

今から面會も半紙を出すと出来ぬやうになりまし左から差上げま  
す△まことに此ふほととがごととで一方ならぬ御心能を掛けました

不意の罪咎ともおあびの申やうも流石の事せん、何事も初しのおま  
なる故と御事書ゆるしを強ひおけす△師からたはいかゞですか、私  
は先々丹寸こし持病の賜で焼ひました、此せつは全くよくなりました、  
あぢかく着て、おいしくたゞも、好きな本を流たり、詩を依つたりして片  
まのり、申すも遺いなきやうに乳のみす△人同のとはわがります、又左よ  
いともまゐりませうからなむくらのたを大仰にして御事下さいますし△この詩  
が出来るした、友衛にでもよませて御聞下さいませ、鳩鳥鳴烟樹昏、  
愁聽點滴欲消魂、風風雨雨家山夕、七十阿孃泣倚門、

(西一千九百零一年二月十日)

幸徳傳次郎

幸徳傳次郎子様

いづく御心配をかけた甲辰ありせん、△申甲越の母と師と伴の上系との事  
は如何やうでも母と孫の御氣のすむやうにして下さるやう願ひます、但此寒さ  
に向ひ長途の旅行は先体にも觸るたゞうと氣遣水すすが、其辺の上  
は徳て場に相決して其さしづと委るに似た言が良心と思ひます、私は  
裁判がすんぬらうの事にしては嫌くはないかと存じます△御心配の報復士



ぬました、母と様、駒を中兵と夫婦にも宜しく申傳へ下さうませ、うしく

(四十二年十二月十八日)

おぼと様

幸徳傳 中、中

は端新有、後のみたまと云ふのは私が左歳の時、大坂で北民先色の  
学僕としてゐる頃に子書たもので、早く煥棄るつもりであつたから、印刷  
なぞしてはイテませへ、アエナ子供の時の詩文などは私の恥になるのだから比  
な反左にしておくれ、其のわり今交際先せに頼んであるから印刷が出来た  
と送つてあげます。〇私も公判で毎日忙しかつたが今日久し振の休めで二三  
ヶ所に手紙書きますから、だは引續きお夫だからは安心もあるやう文  
のおぼおさんにも御両親にも申しておくれ。〇お前は此頃には健康はど  
か、大坂の学校はモウすんだか國に振るな、と水のら私のあはりに二人お  
はアア入に上存行して上げてくれ。〇仙石鶴去殿から先づ金と送つ  
てくれなけれど、べつに手紙をかきることが出来ぬから宜しく申れを申てくれ  
、あの金で毎朝鶏卵を買つてたゞをから、――御両親にも山々よろしく、  
(四十二年正月セリ)

幸徳傳 中、中

富田 殿

昨日今村君の面会に来てくれなから、磯部君へ謝意を表すると相違  
した。〇別に品物などを求めずとも、僕の流で長た亦か何か記念になるも  
うと送るがよからうとソ子と極元たと考もた。〇が拙書は一紙年々愛却し  
て下つてロクな物は無い、マア人に送るな。映入の唐草が教部あつた、(ま  
ぬ品物はありなけれど外にないから、おこめししたけにあなたに、とソ子  
〇その中で三回徳が上下二階ある磯部君に解古書剣掃、古今奇観  
、四書人物傳、情天寶鑑の中で、適吉なうと擇んで、花井、今村の両君  
に送つてくれなへ、右も孟子何かソ子本が老帳あつた、是れは僕が故天  
から貰つたから、天龍の友の友の友、今村君へのあなみ分には、  
此方がよいかも知れぬ。猶小泉、細野、安藤、加藤、などソ子恩儀のある人  
人に謝意をソ子に分けると送りたい考へがあるけな、鬼は角布薩士の  
三君を先に済まして、アトは又アトで残つた品物の中で考へやう。〇山嶺雲に  
は彼れのおむ書と書とをかたみにしたい、後々も大分世話になつたから。〇申江  
賢先生の手紙が二つあつたが母が持帰つたから、残つて居るな。是れも紙分適

當年方面へ後には三つと男女の千文之庫に緑雨の千代が一庫ある、中には子に  
名文もある、只及在にすよりかは緑雨出掌梅家によれはよいと思ふ、是  
は別名は花だけ水で倉人で道りて宣敷は取平いをもえ子〇賣文社業を以  
て、去因梅之茂が備書概と云ふ會字應、先を思ひ出した。

(一、四、百、十、書)

櫻利 考

幸徳傳中

新村忠雄より

先生さんには葉書有新う獄中では名張之水が一番水一いのです私の  
友人も多うござる件が事件ですのび答へてこゝに一つと見え入道位と云ふは  
せず又同志の中には親しい人もあつたのですが彼に疑をうけては解きませぬが私  
身より懐んでかきなども差前様にして長ります△は体はは変りないです  
か外は随分驚つたうと思つたにつけ皆様の代國純とに定案し申して長ります  
△は差入下つた日蓮派、親言々行、青年感想録は昨におかきと、これには  
の通知がありすたが、あつたうお水と、後私との兄弟善兵上にも依  
つたといふが、どうもは代算したさい、その外に三定の宇宙と表は持ちだつ

た探りに記憶して長ります、今は手帳にあり、それらは代算して、  
す△は仰の通り、字の毒で、母親には時々手帳を出して長ります、  
これに存る、母の毒を母親と若くは母、母を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
此の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
あつたが、今は母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
悪いのですが、入獄以来、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
この毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
が、相違りかえり、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
土庫の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
つゝ見たいと思つて、長りました、文子さんからは、四十三年の筆、父を世つてあつた  
といふ事、本年の春、帰郷の際、知り、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
左の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
△は、この毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、  
△は、この毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、母の毒を母とせよ、

五月十九日  
石山 様

忠 雄





の事を考へら小ます。吉山さん社底心はなへと申て病るか知りませぬが今回の世  
 之の被害人アキストル病るは僅かだ、クエアストル病る全く主義主張の  
 存す徒ら病る。私は知一主義から申して才判辨者、その何者をも認め  
 り、要しとせんと又捕は水た日より断頭臺との面談と自ら叫んで病ります  
 私には此長い時間と手教は只苦しいた、侮辱に感下す、されど他の諸君  
 の為め主義者ならざる多々毒人の為めに同情と熱誠と淫が水た辨護  
 士諸君には充分の感御して病ります。彼水著は所謂弁護倫はしなかつた、皆  
 特色あるもので、特に花井白には敬服して病ります。此は若い人が平出氏であ  
 った、近代思想近代人を解剖して偏じ同情を以て偏じたるは、空論感敷し  
 ました、去少さん私一は此の土名の新獲士と此名を被先と判官と権事と獄  
 吏と警察と一室に居し是昔の言論神化を見て現代社会其物を見、その思  
 想正直に味ひ得たものと、水一存じました、又それによつて暴徒なる  
 と此迄分に飲服しし注意をいたしました。私は明後には廿五歳に存するのだとい  
 ふ事、聞いて一先、君が来るよりも、人なす下らぬ事と思は  
 れやう。天壤を眼で眺む口中に歌を病ります。二人の写真と並べて  
 待て病るといふ親を思ふにはあまりに心が痛んで病ります。至善の爲めに

之水が為め、よくない現在と来したのだと、不烈しい苦しみになやんで病ります。  
 此手紙は所謂弁護倫のおとから聴込ひんぶすゆ、一たう最おし慎一おぼかつた  
 吉山さん

吉山兄  
 〇感服した特色ナリ△へば  
 花井村 九八、おぼせ半田 平出川 島  
 北九川島 〇のいさ富島 中 鶴 沢 吉田 磯 部

おめでよう  
 あなたに健康と子供のは多幸を祈ります  
 旧臘中はいろいろ心配下つてありがとう、あなたのお快は二月の休みに  
 また見せられたいからと通知おけありました、此方様によろしく

一月四日  
 堺利彦様  
 新井忠雄

おめでよう、大兄の健康と全家皆様の多幸を祈ります、旧臘中はいろいろ  
 心配ありがとう、借用の本は種々見やり返し申す旨です、お返しお待た下さ

い、私はいつかの様に腹がよくない処へ死をひつて居る、その外別條なく年と  
とりまゝした、元氣は全く張り旺盛です、

一月四日

吉山守邦様

新村忠雄

三〇年前には葉書を見せられても、本流に及ぶ事では有りません、九月からは病み  
なされ、ミセスもおすい水なさらぬ事では困ります、たゞ今は安んじ  
申す事、運者な人も、向りにくい世の中ですから、お今後は、忙しさを祈ります  
平民には、獄中での社会に於いて、同様に大いなる愛りも、ないのです、私は只、私  
共事件發生後の、此後が如何かと案じて、そつてすまなく思つて居りま  
す、亦、死に刑になる事でも、一ます、なき義の本が、徳めたいと思ふなと  
毎日思つて居ります、此慰問状を手にして、過ぎる一書が、なつてくつたりま  
す、

一月十三日

岡田辰之助様

新村忠雄

吉山さん此達者ですか、ミセスは如何ですか、是又、おさしした陽明学傳  
佐と英國産業革命新論は、此朝鮮許可の通知が来りました、つとも、口印に  
すつて下さるのは、只、感謝の外は、ありません、早速、本り下附を、頼みます、  
此種の後、後、五、家兄に、おす事を、許して、ヒト、先の卒も、と、い、家兄  
より、返して、申様、に、一、まず、死刑に、おす事、を、一、まず、す、な、  
の卒が、流、み、たい、と、い、お、も、つ、て、居、り、ま、す、け、水、が、も、マ、ザ、ア、ア、ス、  
を、許、す、の、だ、め、で、す、

一月十三日

吉山守邦様

新村忠雄

吉山君十日附の、此葉書、十三日に、見た、私は、尋て、読んだ、り、の、自叙傳、や、  
の、西比利亞の、拾、六年の、一、節、と、讀、む、様、な、事、が、あ、り、た、ロ、シ、ヤ、お、な、り、で、る、私、層、運  
動、を、や、つ、て、押、は、水、に、人、達、の、中、に、登、録、し、た、り、自、叙、傳、の、ま、い、の、だ、  
各、理、は、ま、い、本、流、に、お、す、事、に、思、つ、て、同、情、さ、し、る、然、し、ア、キ、ス、ト、の、中、に、は、  
切、り、た、り、登、録、し、た、り、自、叙、傳、の、ま、い、の、だ、  
又、が、西、比利、亞、に、五、年、の、苦、役、と、欲、つ、て、改、罪、に、歸、り、て、運、却、し、て、居、り、  
再、び

因は水たと言ふ事と昨年二月の新家で見たのを思つて長ります、彼等は之  
 十餘に於て長る更にヒガネに或は廿五年の西比利亜の酷後、其の理へて一昨秋  
 歐州に帰つた、私は其人な事を思ふ毎に日本で先覚者だと言つて社会運  
 神の陣頭に立つ人達が僅かな事で煩悶したり宗教に行たりするの非  
 常に悲しく痛ましく堪へずせぬ、全体日本の多くの同志の感情又は感  
 と云ふものは單に智識の上のみ得たのだら駄目だ、全く自発的でない  
 のだ、私は思ふ、西山たつて左様だ、私は西山がアキギムにまで来ては水は煩  
 悶し、宗教に退歩する様なるは決してないと思つて長ります、私の  
 知つてゐる西山君と考へて見た、熱心な運動者だ、度々入獄した、分派問題  
 後の彼等は片山といふ敵した多数の同志は議會改革者の彼水から遠ざか  
 った、彼は東京社会新党の孤星にはよつて迫害と戦つた、彼等は千葉の獄中  
 で彼方に常多くして同志はあへりみずあの悲惨な境遇に思ひ及んで  
 とき向えた而して之が主義を握るに至つた唯一の節操ぢやないかと、私  
 には思はれます、私は西山の主張と政策とは余く反対者だが、彼の意  
 意、精神には常に感服して而して彼の境遇に同情して長つたのです  
 ▲西山君が自身の是述は單に改革者の生涯の序幕に過ぎなかつた

かに事が附かず、只だ煩悶して長るのと、此常におもひます、私は今の彼水  
 に向つて彼水の著書改革者の心情を真面目に読み取せとす、めたい、  
 ▲彼水でんた様だ、一般社会が自己と同様に進んだものと思つて長ると自己の  
 運動に對する期望が大きくなるものだ、又同志が彼水も彼水も自分と同じ  
 だと思ふのも復りだ、それ今の切迫の處に及ける精神の打撃手は非常  
 なものだ、私達は常に之水と忘水ではならぬ事だ、西山君は此の精神的大  
 打撃手を受つた上に違ひない、私は思つて同情して長ります、森田君は四十  
 年の年月今夜のあの全境講演の處と演説に入獄したその時、劇同はを出し  
 たのも、と書信々他復けしたのが何も無く、六月廿六日入獄されたので逢つた事は  
 ない、▲赤田は詩人だ、詩人の頭には矛盾の多い煩悶は絶へないものだ、▲君は決  
 して神を捧むなどの力の發つたは、言葉は、私はキリストを神のよとし  
 て長たのだが、先礼を言つたのは、三十九年の二月にたお思儀は、これ水、  
 迷が醒めてもつた、私は一言控つた、その指を握る者ではない、常に之を  
 と標準として、徳を批評し、判断して長ります、安心して、水、▲キリストは  
 神の子ぢやない、其張り弱い人間だ、又初期のクリス、教徒の運動は  
 政治的社会的の運動だ、その水は後の學者や學者が勝つたに過ぎ、

敬したのだ、私はずいといふ男は本領にあつたのか如何と疑つて長が鬼  
 に角彼の男はすまた、義人なし一人あること下しと叫んだ彼水の意  
 多精神はそつて教徒の神壇を愛ひ悲しんだ彼水の心構を非常に  
 公平に入つて説くです、とういふ点のう新約聖書を説いて見たくやつて一月  
 六日に郷里へ江文しこやりました、私一はどな事があつても自分の立場の  
 う御き出す様な事は悲してない安心してくれよ、今三ヶに半田が面会  
 に来るといふ、此夏私の母親より依頼された葉を傳へてくれただ  
 丁四十年の月報と政策論を以て来ると文を絶つた、半田は新村  
 は過激な男だと云つて本年中病つたと申す、其後半田は報徳堂  
 に熱心になつて長り貯金のすめ金の金老道徳を遊覧して長ると云ふ  
 彼の噂が折々故郷の女の本陣中に散見した更に此年の春若い  
 吾人と屋を構へ上りして詩人の控を生活して長るといふ、半田は全  
 等、他臆を思ひ及ぼして今の半田が意外に感心し、半田は全  
 くヤツのヒーローだ、彼水に幸感福を占ふるには今の社会はあまり  
 に残酷だ、此輩の徒がよい一掃に健在と祈つて長る、念及にお  
 つて頼みたい事もある、是れ来るといふ、あすは判決だ、勿論死

秋 山草生

一月十七日  
古川見

刑だ、是水が悠々と書を讀み思案にふける考へて、  
 の注意により一月十七日、  
 悪いので、  
 此輩書に挿入した全く芝居でも見せる様な事が、  
 見たりつたうと、  
 見た、  
 この事は考へて、  
 拍りされた、  
 又同じ、  
 又下すつた、

人だつてすつて中、本統には事の毒に思ひます。西山は神と佛の相の子にたつたと  
古山忍にゆきまじした日事で先覚者だと言つて、私居運神の陣頭に立つ人達が  
僅かな事でも煩悶したり宗教に行事つてしやうのと見ると悲しく非事  
痛ましい事だつて西山忍などは是迄の彼の苦しい境には幸に改革者の生涯の  
序幕たつた事とまがつかないのですから、残念です。余は死刑の宣告を中々に  
行ひては是から暫くの間悠々と讀書し思案し得るのが、水一し私は  
後て之を義によつて批判し判断して振りまげ、極めて平海ですぐは  
余尚水口を去り見家の手紙は覽え務まつ、大石君にもよろしく

一月十七日  
堀利彦様

新村忠成

大石誠之助より

天幕がよくて、公判は教令よく進行してゐる。僕のかうだも大大夫をのりあつてく  
れへ。毎云奉を着又しくしておがたう。先のは愚妻が御邪魔したさう  
だが、彼水は名の如く愚妻で何れ知らぬと案の小さい女だから、折々手紙で慰  
めやつて貰ひたい。弟子め又及びマがら懐へよろしく

十二月十七日

大石誠之助

堀利彦様

此頃は随分寒い。君等は遠者を長るが、僕も一向變つた事がない、毎々雑誌  
など差して送るべきがたい。君は翻訳をやつてさうだが、その水はどんなるのか、向水之字  
物のものでなく、僕は今後よく問題の後とつたやうなるのが、善るやうになるたう  
と思ふ、師国君、岡野君、かたがたをよこし、水、岸の時忍ががまうしく使  
てく水へ、世間は日月たとるが、せいりりか、賤をさるる水、益で長るもの  
感、下ル延、十一月十九日

堀利彦様

大石誠之助

内山愚童より

山口や葛畑兄の出獄せし水、比るさ人の家へ賤かになりましたせう、利一の裁判  
は三月廿九日と定まりましたので、四月中には要定するであり、堀兄の出る  
まで、半決で居たいと思ふたが、さうはけりさうかない、とりをあるたのり、半一の中  
とげての居りますたい、収入監獄、以東英徳の研究は半を費して居ります、半

の赤みのその水の如くでありませ、字典と対簿とを同伴としてやつて居ります、そのして此頃は面白いやうになりませ、と水から先が面白いと一番心配なのは身体の上です、が併し全体この長も外に長き死ぬ時は死ぬを、その先が心配な事は心にかけませ、人との仲は以上面白く自由をやつて来たのであるから、その水からが腹面白く彼を養うのも一飯の仇債でありませ、一日の苦勞は一日にして足り、日日是母日、報は後留で生かしたと思ひ晚は早急で涅槃にいらひませ、人から見たら之道のちまたは彷徨してあると云ふてありませ、自分からは、凡て其感におきける者が研究の材料で大学で實地研究をして長くと嬉しんで居る、裁判がまきまつて腹後したりますた新な問題に接するてありませ、強んと大学から大学院にはまるやうな者である、場見れ出ら水に居るより其文章にまた大の由察と流道しては出せと存人トませ、實に面白世の中であるといふて撰生に注意して自由は高論の日を待たませう

四五年三月十日  
場見子様  
内山愚童

寒くしてそのは雲の降る元な寒い日、火の急の急監居る中、千代と番くのもあまり面白くないとではあるが、誓死刑の恩命に接して

見ると瀬せし長き水ないを入監以来又大の事意を受けし夫人、美子さんと先日僕もバインを差入てく水君に對して最後の何か番かぬは、頼くは目まつる前に一室過つて大に答語をしたいの、水君は、君は一年僕が三年の宣を、受け居時に断腸の思ひがするると言つた、その多きは先な思ひがする、二年同沈黙を守りし君は(指)先日君の送つてく水にバインの中に可義報は披身ひつさげて討死せしと云ふ句があつたが、君等二十四人も近々披身だけはひつさげて討死せしとなつた、オ、山月だけは列外だ、こんな身命をまつて長き中に用紙が半分なくなつた、併し安心してく水君の送つてく水にバインは死ぬまで流して長きのみ、實は何か彫刻して紀念を送りたいのだ、が今は駄目だ、そこで神田の義身の方から僕の流した本を差がせながら、受けたい水に、守田、園野、石恒、櫻等、諸君へ、ルキ代と出したいが、何所か知れぬか、少しに、お過つた、官しく頼む、為ささん、お事は、ありがた、此頃は、味方さんに、お過ひ、左、真、あ、や、は、い、ら、よ、う、い、わ、い、ま、あ、こ、れ、で、僕、は、と、お、る、君、の、言、の、り、い、れ、か、書、て、く、水、今、は、特、別、許、可、に、な、る、の、だ、

四四年一月七日  
場見子様  
内山愚童

本林近蓮 二千より

相違ふと反証をどやつて長らゆる由矢つて結構と思ふハッケスの佐物正老  
兄の筆で傳したラキッリ面白に違ひない出版したラ身一に購読する事だ、先日  
奥子には大さうし手敷を掛けし傳すや、市産で頗る矮い、新佛教学卒の頂  
戴、佛徳の本は老兄の心差入下さつた一買ひ入水もあつて一毎あしづやつて  
長る今近に凡そ二百四十巻やつたが、脚神詞の意化など見るとキヨリする僕  
は佛學には甚だ不適宜だと怪する、その上大杉君が英佛対訳の本など入水して頂  
つて大に困りて長るとはま分横文字の本は必用がない元もはずつと返却して英  
和対訳又は註釈付すう面白本があつたら認むたい英語の法教に負ひい柴五  
見た字でも之水て長る中地頃思ふに外國語などよくやる者は餘程の賢人の  
馬鹿者かだ、古松君新事出版の由まつお出たう、先づ僕子さかか新書正頂  
りたがあれが即ち君の師ふれたと云ひま顔左水左依であつたのだ。書籍は二  
冊も届つたワッ、勉強しやう、併し勸申であつた本を見えるは長らまいかと樂  
しんで見たり何かして長る、後事事はさて置き僕んでは礼を申す、それから君はし  
クリスのプリミチブ、フォーキ正持つて長らまいか若しおこ世若し僕が有罪となつたら流左  
いめんた、金加藤ドクトルへうししはをゆほして長る近ナカラン、長らま差入にあ  
があつて花遊して頂いた老兄からようようくお礼を乞ふ。

五月十一日

増利 五左様

本林近蓮 二千

場家、古松宗守田家、師岡廿史に新年祝詞を申上る、勸申から新年を祝し  
た処が、強う従ひ来つたが、それでも餘り教め子と頂いたから、鬼は御具書  
運の縁の一里塚、目をまいた相違ないのラナア、五月の足馳走、老兄よりの分と師岡  
さんよりの親方頂戴。富山仙中君も差入して下さつたが、同君は兄の宅へ  
来ないたろうナア、若し来たうなら、くは信を乞ふ、△現には承知の事、連  
やが今月中頃には判決を返さる筈だが、僕は一月廿七やと待つて長る、左様自  
由で得られり積りて、併しかり老兄が今午葉で辛棒一匹を左事と云ふ  
なうは僕ん或は羨年の心花痛ます、おぼはらぬ心知水が、國家の目から見え  
は僕ん等の一人は蛆虫一匹と撲ぶ所あつまいと思ふが、用分では仲々そりは思  
わぬのラ茲に煩悶若惚か、堪へて来る、地花同と一なる、佛徳の初詞の意化を  
覚へると云ふぬ、大層な苦心を僕ん園藝の上用ゐた、自利と公益の上  
場家に違ひないのに、徹に残念な事ではある。苗之定の事は、つては心配下さつ  
て親ない、と云ふ大見込は、立つて長る、戸一僕んの書い、言へ、吾人でも妻子の世話は



美と毒の兄弟が世話して呉れる筈だから安心と云ふ。元々僕としては父母の嘆  
 ずか思ひやうする。此事に思ひ至ると九賜寸断の感だ。僕は尚一長く秘中  
 之法とする程に待つた。何と研究しやうかと考へて居るが未だ決意せぬ。只身一  
 に徳字だけはやる決心で居る、と小は余り金が入らぬからその中で今更にお頼みして  
 置し、その人な場を存するた。博文の英法世界の本並一冊分程を奉じて入れて  
 下さい。安價で長く頭を痛めるは徳字に限る係し、その人な事にならざるは其憂ふ。  
 園藝家として任じて居る僕が学問なつかする程ではだぬ。知識欲と云ふ奴を押し  
 止めるが目的だ。

一月六日  
 環利と及様

表近 運 平

祖母父母と始め皆し、母の安否を伺ひ奉る入監以來尙四ヶ月に在るが予審官が  
 予めは直位面会を許さぬからと思ふて左に為めに今日迄西に出さぬから左  
 幸日持に許可を乞ひて候。事件のことは勿論言ふ事は出来ぬが何れ  
 意からず詳細を語る日が来ると思ふ。英國へ注文して置いた種子は着したてぬ  
 うと思ふ。其内にえら豆が青水は試植して置て呉水温室の葡萄も長くなら  
 ううと思ふが僕の一食が何とか決意する迄、其後にして預きぬい味を来温室  
 は湯室と取り除いて火煙を以て依るのたが留之申はやりかけても石炭代の損  
 位に在ると思ふ。僕は健康な胸中の煩悶は山々だが今は云ふまい。○次に其を申兼  
 徳たが日に一を位食物を買入水まいから又上に相供して金を少し送って其水も為  
 にせず、銭幣封入價額表記にして送って預きぬい品所持して来ると金は先月  
 中に費したたので今は官金ばかり居る金は後便

十月十五  
 表近 鶴年 どの

表近 運 平

園許では其後異りはなぬや僕は身体だけは幸者な事件は豫審官の控して在る  
 公判の園の在るに在るに罪状は刑法七十三條の罪と云ふので大審院の裁判を要す。伏在斯く云は其  
 以り此後非常に心に配するにうと思ふが元来向引す水る人意外に有つた位の關係ではある  
 花井今村の安否後士が當て希度の件を以て表下して居るから深く心配なす様  
 申せて呉れ、一有罪と決したたが勿論をい置は各々の私身一つは私言に居るも監獄に居  
 るに大した相違は無いが、何れも運命から退くことと母を容人に身等と扱はざるの義  
 路を尽したいと思ふたに事志と違ふて囚中に日を送る實は断腸の思いだ。予は降限も無  
 い唯に推察の仰と云ふ先、輸入を奉は一冊だけ来た下は如何、單樹盒裁法は着して居居け

け水は澄文を取附して心よ。佛蘭西徳の言は必承頼みたい。〇大西風社屋に申す所當の差入  
 親有る頂戴した係し実の処儀の今の精神必態では差入は寧ろ苦痛だ父母余何玉展  
 こふと思ふ時は甘いのを食ふは針を唇を挿な余のする希くは僅に差入して下さる  
 人は僅る望む処をゆつて書翰籍と入れて下さる様うたいそ水から今は面會通信を許すれ長る  
 のだから操合せ得るなり。一面會に來て下さい家事定下げの事差入水の事なとに依頼したい  
 事が色々ある。茶園の樹は雲の畑に一本をきて居るが如く。〇本家の茶園にあるか。福  
 徳寺耳其。云止白である大川に保存を乞ふ果を見と種名相違な自ら知った上事な似る事  
 △能島谷卒の面白棍に山本高松の鹽見利以君へ慰問状の礼を

上月土の

表近 終事 どの

表近 蓮 一平

去る十五日は松函の手紙北の捧久、何れに居分なる事うで誠申込がな。唯だ成行す  
 と思つて思つてく水今日大西が来て國文には皆々多うと云つたが有者には各事なつた僕ほ  
 不章の罪を御すへき日正業一人で獄中の井口を差する事か出来る金銭や書籍の差入は祝  
 意心配の飯新有る屋身は成るべく差さぬ針にして長る屋物の買入れ一ヶ月に月  
 ぬに極めたのり手だ金はある木も今日大西へ解り金の割らぬの正二舟騎人で思ふから

よりくは松申す復以來ベリ白いの舌を流して傷心する必が方つたか。帰つたら擴張して  
 見たいが今の処では唯を空想を思ふ事うだべり。白い舌は定けけるが。小寺屋が見へたら  
 随意に持帰るさいと云つて出れ。それから本家の田畑へ植た葡萄は如何にして居るか。元  
 分注意して完全には盛るせ。めら水。復希望する。〇終業に申す。聞入へ差入水の礼を申して  
 差水と利能島佐藤の三へと床岩老人にまうく申して。差水在崎老人ははるるか。

上月土の

表近 良 平 復

表近 蓮 一平

本家の老人達は比達者か。薪代は眼も全瘵して。毎学校へ行つて居るで。〇キリヨ、  
 オマへハ、セセイヤ、オツカサニ、イ、ツケヲ、ヨリキイテ、カモコイ、トトナラネバナリマセズ、オトイサニ  
 ガウレバ、カワエガツテアケルカラ、テガミヲヨコレテゴラシ。△御申では別に異状はない。来  
 月十のり公判が同じる筈だ。追々寒くなつて困る。監獄で最も親儀なものは寒さだ  
 是れ小の後は晝夜がた。慄へ流れる。だが秋には御入と親衣とネルの腰巻を差入れてく  
 水之水から毛布一枚敷合して送つて頂け。いか舌の筋も欲しい。今は差向き流す。水の  
 あるから。方便に頼り。堀見四谷(南寺所)から本を差入水て下さつ。左がチャゲルは不祥に  
 なつた。此礼に係る。此事をまじり。通じて。差水。前回の葉香を出す。前に大西からの佛徳

の卒か下つて此節は経本真田と佛徳の鄭強と半分づつやつて居るその水から去小泉が糸  
当を差入水して下つたが同君の位所が分らぬが礼王申す事か出来ぬ堪兒は手紙を去  
丁内便に尋て見て葉書と一枚出して礼王言つて吳水は僕が出立の時に見舞つて下  
つた話居りよる一甲て頂きたいのだが町内の人々と同輩長一中君他田内八中君宮  
園次助君は袴にきて下つたと男外は昆親中で元分覚へぬ苗之中の事何れも仔細  
に知らして吳水知つて何にするでもないが只知りふいのだ今日今村亦獲士に面會した未だ  
見込が立つ知進進んで居る由唯だ何となく色々の上を考へて精神と答する事りだが  
夫水は今は稍や懐小な様だ

工井廿一

志近 鑑察 ぶ

志近 運 平

實に世に類なき裁判で扱つた利法をやつた時は身は狂と云ひり嘆き悲一人  
だて有う、實に思ひやり水多き水は各理はふい僕死の宣ふにまつて道徳の  
善務の家名を却つて安樂な眼りに入るのだが、申身と菊とは之が為か  
口生座の若病と妻はななりあるは身は今近僕の養女に苦むばかりして  
吳水はに僕は女し七報ある事と傳す、弱いか口幼兒王北丹負して

永久の眼に細かおほ居るが、胸の裂ける思ひがする、我事よ人間り  
寿命は測るべからざるものだ、蜂に刺水なり狂大に咬水なりして死するものもある山路で  
車から落を死するものもある、不運と思ふて歸めてくれよ、事件の真相は後世の  
歴史家が明にして吳水も、何卒心を平にして後事を平して吳水僕  
も罪一足た茲に五つて後には啣突するものでは無い、少しく申身事の鳴事  
正考へて見よ、世は今の世で獨立して児供の教育も道やる譯には行かぬが兄弟弟  
姉妹の世法に有り相はなれぬ若し良縁あり再婚する事が出来水は好都合だ  
が僕も思ひい事は仲々あるものでない、何水にして人も善意に解すると申す格を  
と守つて執事たい人と信じて過て失敗したのは人と疑つて成功したよりも良い  
のである申身の兄弟等にしては良平にしては皆極めて心の中な人だ殊に僕には身  
が至として良平の扶即を要する事を希望する、そつて葡萄菊栽培や養蠶  
などで脚を後から自然と養つて天地と親しみ悠々として其を工身外傷  
なりば又以て高尚なる婦人の亀鑑と對すると思ふ頃境に於ては人の  
力更には分らぬ運境に處して知れぬ水多き事の上には積水かし限りある身  
の力なればと申す、雄々々き決心をして身休を大切に健康を保ち父母に奉  
と令し菊王教習願てくれ水之水實に申身の幸福のみでなく僕の名を上げよう

うらのだ... 菊に申し寄るが身お前は学校で甲申り賞ふそくを眺めい  
よ... お前のお父さんはもう帰らぬ監獄で死ぬ事になつたのだ其状は大きくなつたら  
知れる悲しいだらうが只法たつてつらぬを是からはお祝ひをお父さんと思ふを長くその  
まは守りまき人の成て要はよ大きくなつてお前さん大仰にして上る事がお前の仕事であるよ  
一月廿二日 記 森正徳の

松尾 卯一太 より

近引に今新春お目出とう。秘裡別事なく幸に成心せよ。小生もあしは化学や  
哲学の事見なされ昔見ても事多し来る手紙のその一併の力は相抗する程のや  
つは一つも無い。此何の手紙によれば總領の多司郎(当年七才)は習字が上手そ  
う或日学校先生の甲申より母にゆめら思は、句おとさんに見せたいな」と  
申せし之と見れば僕も胸は裂けました。見よ人間はあ、に甲くと弱い。此小  
供だ、僕も思はす日あり神」と叫びました。そして此の瞬間僕も真の愛を意気  
しめた。今後日々思想界での見ものはたどがまて花と蘆花と高は成  
だと思ふ、それから一人長るそれは昔し松山と云うた男を蘆花の句を吟詠  
か見當つたが是つて下す水 (十三日)

松尾 卯一太

増利 七反 様  
大杉 榮 様

所端書致方とう句何とも云ふまゝ存し」と云はれて可憐かと好く候小生も  
まだ信着合に對して手紙づかき身柄なり、差入水致致り、係し文小水  
流文の一端かと思へば何となく胸を穿ち、果ては涙下り、句吟詠大醉  
あり大抵に人を信せぬ、斯く申せば小生は信て計り長る候小生と人  
の心でなし、信かぬ言面は、誰れも我水たが感あることありし、句吟詠大醉  
候もありに安心も水、大杉様師を山杉師より宣敷

(一月廿二日の附あり)

松尾 卯一太

環 利 七反 様

事書

坂 本 信 馬 より

今年の子供は、以何デサイマシタリ、皆お御一語デオ楽レイゴデゴサイマシタテセウ和ハタッ  
タキレノ録ヲ頂イ初ノミデスキナアベトリ、ミ履ベムトが出来マセデシタ、新佛教有難ウ  
候ジマシタ希当ノ差入シハ成ルベクナシバヨミテタガサイ、寧ロソノ金デ却キデモ申敷イヨ

エマス、オ年代ガガ余者ノ差入ヲエテツサイマシタ、御アノセツハ御礼ヲ申シテ下サイ  
 マシ、新仙教デハ過度時代ト云々、近時ノ悪傾向、彌葛藤ノ一部、残りノ煙ノ一部  
 ・日蓮論ヲ流ム、是レ等ヲ面白ク讀ミマシタ、早晚出版セラル、タロウト存ジマスナ  
 レドモ在リノ差入レテ申イタシマス、各論急ガデハアリマシタ、新仙教ノ新号号差ニ  
 入テ下サイ、日基督、釈迦、孔子、日蓮、ソマニルニ職多論、自助論、勤儉論「マードニ  
 三三論、成功論」通俗茶根譚、通俗志四録、フクニクリノ自叙傳、聖文生伝(内外出版  
 社出版)整頓註解冊に戸繁集思(新刊)ケークエ行録(新刊)和漢高僧名録新註  
 、寒山詩新註、坦山和尚全集、社会心理研究(新刊)最近思想實際之義(新刊)井哲  
 著教育の修養、死後ノ生活、遠藤著孔子傳、常盤著釈迦ニ仏、加吹著東人論  
 講話村上著東人論、里岩田著東人問題、佐野天聲著イエスキリスト、毒可著基督  
 督聖典、廣長在、理想的商業、マクハ山アルケシトケリ、是レデカクヒツ「元日ヤ門」原  
 春の声」 一月六日 坂本清馬

堺利也彦様

拝啓 寒 曙 數 候 慶 老 兄 出 獄 次 年 益 々 壯 健 の 由 大 慶 慶 地 事 に 此 を 以 陳 者  
 小子 幸 甚 幸 甚 在 茲 欠 久 久 他 日 以 休 心 之 際 云 候、故 之 先 達 は 新 佛 教  
 近年 之 以 差 入 小 後 小 親 折 代 札 申 者、ゼ、ス、レ、ゾ、イ、オ、ウ、ア、ウ、ハ、不、行、に、初、め、り、候、存  
 宅 下 の 手 続 き を 以 ち 了 し 意 され、石 山 兄 に 宅 下 の 事 祈 せ、裁 判 引 流 して 折 之  
 大、判 決 の 後 早 日 在 倫 在 罪 たる べし と 案 一 子 居 り 申 事 に 以 宅 下 下 之  
 加 藤 時 々 々 以 希 希 者 差 入 折 代 札 折 折 存 候、然 一 斯 折 代 事 是 全 身 之  
 消 費 に 以 ば 以 後 決 して 在 折 代 札 配 慮 之 程 以 傳 言 下 候、少 子 以 此 事  
 件 案 之 の 以 前 之 以 運 却 と 断 念 致 した、大 場 以 今 後 は 同 志 の 人 と 交 際 致 せ  
 ぬ 決 心 に 以 ち 否 存 老 兄、旭 山 兄、常 兄 の 三 人 以 此 の 様 子 案 之 玉 義 及 心 運 動  
 以 祈 之 思 以 切 っ て 貰 いた たく、此 事 出 獄 後 之 話 下 可 存 小 子 之 善 行 急 げ  
 と 申 下 候 也 有 之 以 ば 尤 に 小 子 の 善 見 の 大 体 を 認 め ぬ

- 一 断 然 今 日 迄 の 案 義 を 改 三 案 寸 べき 事
- 一 堺 兄 以 文 学 及 科 学 の 著 述 を せ べき 事
- 一 旭 山 兄 以 之 として 宗 教 上 の 著 述 を せ べき 事
- 一 常 兄 以 堺 兄 正 輔 以 科 学 の 著 述 を せ べき 事
- 一 右 三 人 連 名 の 以 互 々 手 紙 云 々

坂本清馬

新佛教に捧受仕候、正におりの賜ものにて誠に御有る存じます、先生は永く御申仕候に比肩承るる事ありと、いへば御静に休養を願ひます、私も精神の飲食をすする時が来りし事を略しく思ひます、日々徒馬と英徳の獨習に在りして長ります、是れ多量の入札を以て意義にせむ所なりとす、心身共に健全に安んず、誠心に入札、以て入札が志願事御心申す葉（竹の小丸）同志を名前はおす水すしたるが経緯史論を以てし、たが、其人が持して長らるるは、是れ又を無たし、百鬼忌の語では行衛不明の捧受候し、しつよりした、その水は是れ承るる事す、は、其の毒です、すが、は、御べを祈りた、いので、本が少く買いた、いので、すが、い、中、本が、宣、い、で、せ、う、か、歴史を讀みたいと思ひ、古事記や日本史、経路を讀み、し、左、歴史には限り、せん、宣、し、き、本、が、古、小、ば、は、教、え、を、教、ひ、ます、又、博、文、録、の、り、表、行、せ、し、姉、崎、の、此、の、法、ニ、ヨ、リ、シ、テ、行、は、な、れ、

「意志」と現存として、世邊、此、何、の、も、書、籍、で、せ、り、我、も、が、流、を、本、の、比、批、評、行、は、な、れ、

二月

粵 利 彦 様

武田 九平

事情は新書候にて承知にて、御座、僕は何れかの事いせ人、唯々先生との要請を御すつみ、差入りさし、昔は近、口、行、先、より、送、り、候、は、夫、人、へ、宣、し、く、他、の、禮、を、諸、兄、の、態、を、は、立、派、で、お、つ、た、先、生、を、以、て、諸、兄、の、健、康、を、祈、ら、

粵 利 彦 様

高木 顯明より

揮筆に冬は新佛教に惠典修列律子御候、又年取候に被下儀也、兼、甲、候、意、を、は、礼、申、上、候、本、月、申、頃、に、判、決、リ、事、何、日、並、の、送、り、を、三、回、に、化、候、旨、を、罪、と、爲、じ、後、同、出、鑑、の、上、に、推、察、揮、筆、可、仕、候、先、に、以、礼、迄、

粵 利 彦 様

高木 顯明

岡村 寅松より

東京大学経済学図書館蔵 旧文書室所蔵古文書 5507685401

おそはばりながら新事お覚てたうございませす。拙申の新事は何事景色もまたず  
 方と新事よりありませぬ旧事公判申の差入希当は加藤君ばかりし由又二月に  
 も且より差入に頼りて頼に年賀のおほき頂き申した事は亦等々の礼状  
 きて正月迄二月迄の差入いたし申したる不祥となり失礼なり申した今日  
 おく水ながら申し申す貴家は一同様は多祥せうまだ新版は出来ませぬ  
 ぬか私一若く判の模様は申し申すは冬よりせぬ若く出来ぬは氣遣い申す  
 は中取下さい幸徳志近 管野君等の健康にて新本忠君の元氣も顔も  
 とだけ申し申す申す成程君は口を平すとかなんか地味使の由も  
 申した、私とて現健にて官能のみにはいさか空腹を感じます次身は精神を  
 頼み申す私今迄の事意表とする處で良心は天地に即せぬ妙な行柳り  
 被をとり申したるが即ち疑心晴き事と存じます先達てのは便に伊藤  
 澄信君定に私の手紙は覽の由佐野後の貞男の件は亦小と意味深長のり  
 申すは恐らくは免下さい處が地味に有り細君の實承より離縁を申す小  
 申した事は新聞代や寺院の説教で大変社共の冬を差けて攻撃ある由未  
 決の者も修醜なものです新事をもて坊さん後教の扶神とは驚き  
 左近々若く出獄出来すに今新報業報ありつかばはなりませぬが一寸水一

園林 宣松

一月十五  
堀利 彦 様

堀松 興 彦 様

賀賀新春 向賀賀を頼り親友書存知、御中の新年を迎るに  
 二回去り何処に長も新年は新年身出を存じし

一月十  
堀利 彦 様  
堀松 興 彦 様

謹啓 芝殿は下寧なる本は賜興功成り千萬難有は礼申し候は礼  
 子に申す候 頓首

四十三号 壬午 三月

堀 利彦 様

新田 融

同奉 類一印

昨年節当に差入北の禮儀差上げ候事、其申に事件の由、容に直る節、有之、責任不詳の通知を三月に相受け候事、身にて、皆押の由、留意を致し、したる状にて、更に各之の伺、仰、卒に、相察の上、御容、上下交し、皆様に、宜しく、は、借、是、波、り、至、は、新、と、け、申、候、判、決、ル、茲、十、数、日、と、相、成、申、候、是、は、随、分、六、六、敷、様、今、日、より、推、察、被、致、し、当、日、は、月、に、か、る、様、な、事、は、故、あり、に、出、来、事、相、知、り、く、と、存、し、北、條、な、る、者、に、也

一、月、四、の

同奉 類一印

堀 利彦 様  
不 杉 栄 様

新田 善兵衛 様

三四年振として、自由な新年を、と、迎、い、返、有、尊、下、の、清、祥、工、賀、し、す

玉に、掛、款、も、し、左、し、す、世、人の、に、色、々、に、心、配、に、預、り、す、し、て、唯、感、御、致、し、候、事、が、早、速、に、禮、儀、状、も、差、出、す、へ、き、で、了、た、が、は、任、可、知、れ、せ、ん、の、心、を、お、し、た、り、て、た、り、す、し、た、は、御、容、に、致、り、ま、存、じ、す

親、誼、親、方、に、禮、申、と、す、又、藤、押、の、は、名、前、で、差、入、と、頂、戴、し、た、し、す、一、た、折、も、は、え、い、す、一、た、は、ま、ま、一、く、風、聲、舟、と、頼、り、す、一、年、賀、状、に、礼、申、と、す、入、監、以、来、一、二、の、朋、友、の、親、戚、も、志、水、累、た、様、に、手、状、も、差、出、す、一、月、の、を、送、り、す、一、た、の、を、い、ろ、く、玉、見、つ、方、な、ら、ず、申、と、て、は、慰、問、之、頂、き、度、い、と、思、ひ、ま、す、の、皆、差、出、す、に、諒、察、と、祈、り、す

一、月、六、の  
堀 利彦 様

新田 善兵衛 様

古山 力佐 様

先、の、は、御、心、問、候、お、り、親、しく、は、礼、申、と、す、が、私、は、別、に、矯、節、さ、水、左、の、で、も、決、意、し、た、の、で、い、ち、り、す、ま、が、全、更、致、し、方、な、ら、ず、一、年、賀、状、の、冊、の、か、と、い、ろ、く、し、候、が、待、つ、て、た、り、す、が、時、の、た、つ、が、早、い、と、死、ぬ、の、は、い、や、な、ら、ば、い、す、皆、押、の、は、健、康、と、祈、り、先、つ、は、は、暇、乞、ひ、す、也



再此  
同部  
及之  
分  
様

吉小  
力  
依

八  
九

